

經濟と政治との関連の問題（七）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山 本 二 三 丸

二十一

一九〇三年ロシア社会民主労働党第二回大会において、どのようにしてボリシェヴィキとメンシェヴィキとの分裂・抗争が生じたかは、前節でみたとおりである。そこでは、両派の根本的な思想傾向についての簡単な特徴づけも示されている。しかし、両派の対立・抗争を分析してどちらが真に正しい革命的前衛組織としての実をそなえているかということの的確に判断するためには、分裂のきっかけとなった大会でのやりとりや根本的な思想傾向のちがいを検討するだけでは、不十分である。はるかに決定的に重要な問題は、革命的闘争を指導すべき前衛組織として、両派のいずれがただしくその実体をそなえているかということ、いいかえれば、どちらが真に革命的な戦術をうちだしているか、そしてまた実際にどのように闘争をおしすすめてきたか、ということである。それゆえ、一九〇三年第二回大会後まもなく勃発したロシア第一次革命にたいして、両派がどういう戦術をもつてのぞんだか、どのようにたたかったかということを検討することが当面の課題となるであろう。ただし、その課題をとりあげるまえに、メンシェウ

イキが「前衛組織」としてはやくもどういふ性格を示していたかということをも簡単にみておくことが、この場合適切だと考えられる。つまり、メンシェヴィキが、第二回大会での分裂後、労働者にたいしてどういふ宣伝を——とくにボリシェヴィキ攻撃の宣伝を——やっているか、そして、「前衛党」としてどういふ新しい「闘争方針」をうちだしているかということを検討することによって、その基本的な体質をはっきりさせておこうというのである。

まずはじめに、メンシェヴィキが労働者にたいしてどういふ宣伝をしていたかということをも、レーニンの論文、『うぐいすはおしゃべりではやしない』（一九〇五年一月）によって簡単にみてみよう。つきにかかげるのは、この論文の最初の部分からの抜粋である（……は中略部分を示す）。

「新イスクラ派がたったいま出したばかりの小冊子、一労働者著『われわれの組織における労働者とインテリゲンツィア』（アクセリロードの序文つき）に注意をむけたい。「少数派」または新イスクラ派のデマゴギー的な説教が、どのような成果をもたらし、また現にもたらしつつあるか、また新イスクラ派が、自分たちのしゃべりまくったがらくたの全体から、いまだのようにながれようとつとめているか、ということをもみごとに示している、このきわめて教訓的な著作……。さしあたり、この小冊子と序文との核心だけを指摘しておこう。

「一労働者」は不幸にも新イスクラ派の説教を信じてしまった。そこで彼は、アキモフの精神で、ラボーチェエ・デーロ的な空文句をさかんにまきちらしている。「われわれのインテリゲンツィア的指導者は……労働者の自覚と自主活動とを發展させることを……みずからの任務としなかった……」。自主活動への志向は「系統的に迫害された」。「どんな型の組織にも、労働者の自主活動を發展させる余地はなかったし、またいまもない……」。「経済闘争はまったく放棄され」、宣伝や煽動の集会に出ることさえ、「労働者はゆるされなかった」（こんなことさえ言っているのだ！）。

デモンストレーションは「その生命をおえた」。——すべてこれらのおそろしい事から（以前の『ラボーチエ・デーロが旧『イスクラ』に反対して長いあいだ叫びたてていた）は、もちろん、「官僚主義的中央集権主義者」たちによって、つまり、ラボーチエ・デーロ派とたたかったわれわれの第二回大会の多数派によって、ひきおこされたものである。腹を立てた少数派によって党大会にたいしてけしかけられたこの不幸な「一労働者」は、この大会が「われわれなしに」（労働者なしに）、「われわれの参加なしに」おこなわれ、そこには「ほとんどひとりの労働者」もいなかったということ、この大会をさんざんにこきおろしている。——そのさい、大会の代議員であったステパノフ、ゴルスキー、ブラウンなどの真の労働者はみな、多数派の断固たる支持者でありインテリゲンツィア的な無定見の敵であったという事実は、もちろん、遠慮ぶかく回避されている。だが、これは重要なことではない。重要なのは、新イスクラ派の説教がどんなに際限なく墮落しているか、ということである。彼らは、選挙で敗北したあとで大会を「こきおろし」、いっさいの社会民主党大会に唾をひっかけるように人をそそのかすというやり方で、大会に参加しなかった人々のまえで大会をこきおろし、もっぱら大会の名で活動して中央諸機関に自分たちが高貴なやり方でもぐりこんだまさにそのときに、この大会をこきおろしているのである……」（全集第四版、第八巻、四〇一—四一ページ）。

まず、ここに示されている「一労働者」の党および党大会にたいする非難の言葉をよくごらんいただきたい。これらはことごとく、トロツキーが一九一〇年の例の大論説のなかでポリシェヴィキ（およびメンシェヴィキ）にたいして投げつけている非難・攻撃の文句と、まったく同じものである。つまり、トロツキーは、一九〇四年にメンシェヴィキがポリシェヴィキにたいして投げつけた非難・中傷の空文句を、そっくりそのまま頂戴して、六年もたつてから、ポリシェヴィキとメンシェヴィキをやっつけ、自分の一派——ヴィーンの『プラウダ』派——だけ売りだすために、

けんめいにならべたてているというわけである！ トロツキはその煽動政治屋としての野望をとげるために「ラボーチェエ・デーロ的な空文句」を意識的にふりまいているが、「一労働者」は、これとまさに正反対に、メンシェヴィキ（トロツキークラ）の意図的「空文句」をふきこまれたものの、労働者としての階級的本能をその身につけているおかげで、この「空文句」のかくされた本質を感じとっているのである。この点についてのレーニンの説明をつぎに引用してみよう。

「……彼は、あらゆる新イスクラ派あるいはラボーチェエ・デーロ派と同じく、これらの空文句をくりかえしてはいるが、冷静なプロレタリア的本能で、言葉の裏づけとなる事実を得ようとしており、おしやべりで養われることに満足していない。彼はこう言っている。指導者の「構成に、変更をくわえない、かぎり」（傍点——「一労働者」、美しい言葉はいつまでたっても言葉にすぎない。すべての重要な党機関の門戸を労働者に開放することを要求しなければならぬ、インテリゲンツィアとの同権を得るようにつとめなければならない、と。あらゆる空文句にたいする真のプロレタリアや真の民主主義者の深い不信の念をもって、「一労働者」はこう言っている。委員会がインテリゲンツィアだけに占められないという保障はどこにあるか、と。わが新イスクラ派にとってこれはまさに的を射ている。このすばらしい質問は、ラボーチェエ・デーロ式のけしかけも、プロレタリアのまだ明晰な思惟をくもらせなかったことを、示している。彼は、率直にこう言明している。自分が働いていた委員会は「紙上の原則の点では終始少数派の委員会であったが（聞くがいい！）、その実践の点では多数派の委員会とすこしもちがわなかった。どのような責任ある機関、すなわち指導機関（委員会はもちろんのこと）の門戸もわれわれ労働者には開放されていなかった」と。だれひとり、このメンシェヴィキの労働者はどうまくメンシェヴィキの仮面を剥ぐことのできたものはない。彼

は、保障がなければ、プロレタリアートの自治とか自主活動とかいうお談義が月なみな空文句にとどまることをさうした。ところで、「同志一労働者」よ、社会民主主義組織ではどのような保障が可能なのか、それについて君は考えたことがあるのか？ 党大会にいっしょに集まった革命家たちが、その後、大会で自分たちが選出されなかったことに腹を立てて、大会はイスクラの見解をうちかためようとする反動的な試みであった（新『イスクラ』の編集で発行された小冊子『われわれの政治的任務』のなかでのトロツキーの言葉）とか、大会の決定は神聖ではないとか、大会には大衆から出た労働者がいなかったとか、叫びだすことのないようにする、どのような保障がありうるだろうか？ 党組織の形態や基準にかんする一般的な決定、党の組織規約と呼ばれ、そういう規約の形でしか存在しえないような決定、こういう決定が、あとで無定見な人々によって、規約なんてそんなものは官僚的で形式主義的だということを口実に、彼らに氣にいらぬ部分を引きさかれることのないようにする、どんな保障がありうるだろうか？ 共同で採択した組織規則に違反した人々が、あとで、組織とは過程であり、組織とは傾向であり、組織とは内容に歩調をあわせた形式であり、したがって組織の規則を守るのは愚かしく空想的なことだと論じはじめることのないようにする、どんな保障がありうるだろうか？……」（前出、四一—四二ページ、傍点およびゴシック体—レーニン）。

この後半に述べられているのは、「保障」のよいことにして、メンシエヴィキがどんなにえげつない規律破壊と乱暴狼藉をやつてのけたかということのさまざまな実例である。とくに、後年「自伝」のなかで、第二回大会後じきにマルトフと縁を切つたと言明しているトロツキーが、その綱領的小冊子『われわれの任務』のなかで、「大会はイスクラの見解をうちかためようとする反動的な試みであった」と書いていることは、銘記する必要がある。この小冊子は、ポリシェヴィキにたいする非難・中傷・攻撃のためのあらゆる空文句のめざましい「虎の巻」とし

て、メンシェヴィキにより珍重されたものであるが、それについては、またあとでふれることにしよう。

では、この「保障」の問題について、ポリシェヴィキはどうこたえているか？ レーニンはその「一労働者」が、他人の言葉をうのみにして、なにひとつ明確な指摘もせず、レーニンの関連する労作——『われわれの組織上の任務にかんして、同志にあたえる手紙』（一九〇二年）——を一見することすらしないで、「ただレーニンの「組織計画」に反対することだけをしていることを指摘し、これにたいして、つぎのように教示する。

「だが、もし「一労働者」が自分をけしかけた人々の言葉を信頼せず、この手紙に目を通したならば、彼は、そこにつぎのことを読んで、大いに驚いたことであろう。

「できるだけ多くの労働者を十分に自覚した職業的な革命家とならせ、委員会にはいらせるように、とくに努力しなければならない。委員会には、労働者大衆のあいだにもっとも多くの結びつきをもち、最大の『名声』を博している労働者革命家を引きいれるように、つとめなければならない。だから、委員会には、なるべく労働者そのものの出身の、労働運動の主だった指導者が、すべてはいってなければならない」。

同志「一労働者」よ、この文章を一読し、再読されたい。そうすれば、君は、旧『イスクラ』とその支持者、つまり第二回大会の「多数派」をばこきおろしている、ラボーチェエ・デーロ派と新イスクラ派がどのように君をだましたかがわかるであろう。この文章を熟読して、つぎのようなわたしの挑戦に応じてみたまえ。——われわれの社会民主主義的文献のなかで、「われわれの組織における労働者とインテリゲンツィア」という君の提起した問題が、わたしがやっているのと同じように、明瞭に率直に、決定的に提起されている箇所を、しかも、できるだけ多くの労働者を委員会へ引きいれ、なるべく労働者出身の労働運動の指導者をすべて委員会へ引きいれることの必要を指摘している個

所を、みつけてもらいたい。請けあつて言うが、このような個所を君はほかに指摘できないであらう。請けあつて言うが、陰口屋のむだ話にもとづいてではなく、記録文書にもとづいて、つまり『ラ、ボ、ー、チ、エ、ー、デ、ー、ロ、』にもとづき、『イスクラ』や小冊子類にもとづいて、われわれの党内闘争を研究する労をとった人ならだれでも、新イスクラ派の説教の欺瞞性とデマゴギー的性格とを知るだろう」（前出、四二―四三ページ、傍点―レーニン）。

ところで、「プロレタリア的な率直さと大胆さ」をもった「一労働者」の追及にたいして、メンシェヴィキの指導者であるアクセリロード――それまで党にたいして「社会民主党はインテリゲンツィアの組織だ」という中傷的デマを馬鹿のひとつ覚え式にふりまいてきた旗頭のひとり――は、なんとこたえているか？ レーニンは、つぎのように――皮肉をこめて――記している。

「……………この当のアクセリロードは、この中傷から「一労働者」の引きだした率直で正直な結論にびっくりして、身かわしてしまふ。

彼は序文のなかでこう言っている。「社会民主党の誕生と最初の発展の時期には、ロシアの革命党は純粹にインテリゲンツィア的な党であつた。……………いまでは、自覚ある革命的労働者が社会民主党の主要部隊（聞かがいい！）をなしている」。

哀れな「一労働者」よ！ アクセリロードの「美しい言葉」を信じたことにたいして、彼はなんと罰を受けていることか！ そして、「自主補充」の必要しだい、一年半のあいだに、あるときはこう言いあるときはああ言うような著作家を信じるものは、今後ともつねに罰を受けることであらう。

アクセリロードが、彼に面とむかつて提起された「保障」という問題から、どのようにして身かわしているかを

みたまえ。これは逸品である。これは新イスクラ文献の珠玉である。「一労働者」は、組織内での労働者とインテリゲンツィアとの関係について述べている。「一労働者」が、保障なしには、同権なしには、すなわち選挙原則がなければ、官僚主義的でない中央集権主義という美しい言葉もたんなる空文句にとどまると、言明しているのは、まったく正しい。そこでアクセリロードはどうこたえているだろうか？「われわれの組織のなかでの労働者の法的地位の変更（!!）」という考えに熱中するのは一面的であり、小冊子の筆者は、害悪の除去という問題を不当にも（!!）「形式的な組織関係（!!）の分野へ」うつしており、「法における平等化（!!）」という部分的任務は「社会民主主義的方角でのわれわれの実践の今後の発展の過程のなかで」のみ解決されるものであることを、不当にも（!!）忘れていゝる。「小冊子の筆者がとくに関心をよせている問題は、わが党の意識的な（!!）集団的活動の過程ではじめて徹底的に解決される」というのである。

これは、まったく珠玉ではないであろうか？……」（前出、四四―四五ページ、傍点―レーニン、（!!）——山本）。

レーニンがいみじくも指摘しているように、ここにあるのは、うそ、すりかえ、ごまかし、詭計、ペテンの傑作ばかりである。同じ「珠玉」の創作者、トロツキーが、第二回党大会でレーニンに後足で砂をひっかけてマルトフ、アクセリロードにくつついて、けんめいに「党大会はイスクラの見解をうちかためようとする反動的な試みであった」と書きたてているのは、インテリ的指導者、アクセリロードから、こうした数々の「珠玉」の創作方法の教授にあずかるうとしてのことであつたろうか？そしてまた、インテリゲンツィアの素養のない「文学青年」くずれのこの弟子は、その品性のいたすところ、師のつくりだした「珠玉」のほかに、さらに、中傷、罵詈雑言、けしかけといった傑作をまで創作することとなつたのであろうか？まことに、師をはるかにしのぐ出藍の弟子ではある。

そこで、以上のしめくりとしてレーニンがその論文の終りにおいてあたえているメンシェヴィキの活動方針と立場との特徴づけを、つまり「前衛党」としての性格の描写を、つぎにあげておこう。

「新『イスクラ』とアクセリロードにとって重要なのは、組織原則ではなくて、無原則的な立場を正当化するためのおしやべりの過程である。あの有名な、過程としての組織の理論（とくにローザ・ルクセンブルグの諸論文を見よ）、マルクス主義を俗悪化し、けがすこの理論全体のなかには、無原則性の擁護のほかにはどんな内容もない。

くりかえして言おう。新イスクラ派の組織上の立場の全虚偽を知るためには、「一労働者」の注目すべき小冊子をどんなに推薦してもまだ足りない。われわれは、メンシェヴィキが選挙原則の説教でもってポリシェヴィキにけしかけている労働者諸君に、この小冊子をとくにつよく推薦する。労働者は空言家や嘘つきをみごとに摘発する。……」（前出、四五ページ、傍点―山本）。

まことに、さきに前節で記したように、⁽⁸⁸⁾一九〇五年初頭においてはやくも、ロシア国内の先進的労働者と革命的実践活動家の圧倒的大多数がポリシェヴィキを支持し、ロシア国内の二〇の委員会のうちの十六委員会が完全にポリシェヴィキの側に立っており、メンシェヴィキの側には、ほんの少数の労働者と小ブル的インテリおよび亡命インテリの集団しかついていないという事態が生じたのは、必然的な根拠をもっていたのである。そして、メンシェヴィキが四散して、一部は反革命陣営に走り、トロツキーの主宰するヴィーンの『ブラウダ』派が野垂れ死にせざるをえなかったのも、同じく必然的根拠をもったものであったのである。

(88) 本誌第二十六巻第一号、一四七ページ、参照。

そこでつぎに、メンシェヴィキが「前衛党」としてどんな新しい「闘争方針」を立てていたかということ、新

『イスクラ』編集局が発表した党諸組織あての手紙『黨員のために』（一九〇四年十一月）について吟味してみよう。

二十二

手紙『黨員のために』にたいしては、レーニンがただちに批判論文——『ゼムストヴォ・カンパニアと「イスクラ」の計画』——を書いているので、この論文によって、メンシェヴィキの新しい「闘争方針」の性格を——ボリシェヴィキの闘争方針の性格との対比において——とらえることにしたいとかがえる。レーニンは、メンシェヴィキの『黨員のために』が客観的にどのような意義をもつものであるかということを明らかにするために、必要な「まえおき」として、その論文の冒頭につきのような説明をおいている。

『イスクラ』編集局の署名で党諸組織あての手紙『黨員のために』がついさきごろ公表された。ロシアがいまほど憲法に近づいたことはかつてなかった——と、編集局は声明して、「政治カンパニア」のまとまった計画、憲法を請願する自由主義的ゼムストヴォ議員に働きかけるためのまとまった計画をくわしく述べている。

新『イスクラ』のこのひじょうに教訓に富んだ計画を検討するまえに、大衆的な労働運動が発生していらい、ロシア社会民主党内でわが自由主義的なゼムストヴォ議員にたいする態度の問題がどのように提起されてきたかを、おもいだしてみよう。周知のように、この問題について、大衆的な労働運動の発生のもとと当初から、「経済主義者」と革命家とのあいだに闘争がおこなわれた。経済主義者は、ロシアにおけるブルジョア民主主義を頭から否定し、プロレタリアートが反政府的な社会層に働きかける任務を無視するまでになったが、それと同時に彼らは、プロレタリアートの政治闘争の規模をせばめ、意識的にせよ、または無意識的にせよ、政治上の指導的役割を社会の自由主義分

子にゆだね、労働者には「雇主と政府とにたいする経済闘争」をわりあてた。旧『イスクラ』に拠った革命的社會民主主義の味方は、この傾向とたまたまった。この闘争は、自由主義の機関紙『オスヴォボジデーニエ』が出現するまゝと、出現したあとの二つの大きな時期にわかれる。第一期には、われわれは自分の攻撃の鋒先を主として經濟主義者の見解の狭さにむけ、ロシアにはブルジョア民主主義派が存在しているという、彼らの氣づいていない事實に彼らを「つきあたらせ」、プロレタリアートが全面的な政治活動をおこなう任務、プロレタリアートが社會のあらゆる層に働きかける任務、自由のための戦争における前衛となる任務を、強調した。新『イスクラ』の味方がこの時期を乱暴に歪曲すればするほど（『イスクラ』の編集で出版されたトロツキーの『われわれの政治的任務』を見よ）、また彼らが、こんにちの青年たちがついさきごろのわれわれの運動の歴史を知らないことに乗ずれば乗ずるほど、この時期とその基本的な特徴とおもいだすことは、現在ますます時宜をえており、必要である。

『オスヴォボジデーニエ』が出現したときから、旧『イスクラ』の闘争の第二期がはじまった。自由主義者が独自の機関紙と独自の政治綱領とをたずさえて登場したとき、プロレタリアートが「社會」に働きかける任務は、当然變化した。すなわち、もはや労働者民主主義は、自由主義的民主主義を「ゆすぶり」、その反政府的精神をやりうごかすだけでは、すまされなかつたのである。労働者民主主義は、自由主義の政治的立場のうちにはつきりと暴露された中途半端性を革命的に批判することに、重点をおかなければならなかつた。自由主義諸層にたいするわれわれの働きかけは、自由主義者諸君の政治的抗議が首尾一貫せず、不十分なことをたえず指摘するという形をとった。……

公然と登場した自由主義にたいする社會民主主義派の新しい立場は、第二回党大会のころには、すでにひじょうに明らかとなり、強固なものになつていたので、ロシアにはブルジョア民主主義派が存在しているかどうか、反政府運

動はプロレタリアートのあいだで支持をうけるべきか（またどんな支持をうけるべきか）ということについては、だれにも疑問すらおこらなかった。論じられたのは、この問題にたいする党の見解を定式化することだけであった。そしてここでは、一方では自由主義者との協定を追いつめ（しかもまったくその時でもないのにこれを追いつめ）、他方では、こうした協定に仮空な、自由主義者に実行不能なことがはじめからわかっている条件をつけている、スタロヴェルの混乱した決議よりも、自由主義的な『オスヴォボジデーニエ』の反革命的で反プロレタリア的な性格を強調した、プレハーノフの決議の方に、旧『イスクラ』の見解がはるかによく表現されていたということを、指摘するだけで、わたしには十分である」（前出、四六三―四六五ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

ごらんのように、レーニンは、自由主義的ブルジョアजीにたいするプロレタリアート党の態度について、自由主義的ブルジョアजीが機関紙『オスヴォボジデーニエ』を発行し（一九〇二年）独自の政治綱領をもって政治の舞台に登場するようになった時期を境として、それ以前とそれ以後とではちがっていること、それ以前の第一期においては、攻撃の鋒先が主として経済主義者に向けられ、プロレタリアートが全面的な政治活動をおこない、自由主義的ブルジョアजीをふくめて社会のあらゆる層に働きかけ、自由のための戦争で前衛となる任務がつよくおしだされたが、それ以後の第二期においては、自由主義的ブルジョアजीの「中途半端性」を「革命的に批判する」ことに重点をおくべきである、と明示している。そしてまた、新『イスクラ』派「メンシェヴィキが右の第一期について、彼ら自身のもっている経済主義的性向のゆえにこれを「乱暴に歪曲している」ばかりでなく、すでに「自由主義的民主主義派の中途半端性を革命的に批判する」という党の見解を定式化することだけが問題となっていた一九〇三年第二次党大会の席上においてさえ、指導的メンシェヴィキの一人、スタロヴェル（＝ポトレソフ）はいぜんとして自由主義

者との「協定」に執着していたものだということが、ここに明らかに示されている。『イスクラ』編集局の手紙―『党員のために』―は、まさにこのポトレソフの主張を拡大したものとしてみなされたのである。

論文『ゼムストヴォ・カンパニアと「イスクラ」の計画』の本文は、四つの小節から成っているが、いずれの小節もきわめて重要な内容をもっており、とくにこんにちのわが国の「前衛党」の日和見主義―修正主義の泥沼へのとどまるところを知らない転落という事実を前にして、まことに傾聴に値する貴重な教訓と決定的に重要な主張とを多々ふくんでいるものである。われわれとしても、それらの主張をよく玩味し教訓を学びとるべく、これを慎重に検討しなければならない。

その第一節の冒頭で、レーニンは、まず、『イスクラ』編集局が、「自由主義的民主主義の不決断と中途半端性の問題や、自由主義的ブルジョアジーの利益とプロレタリアートの利益の敵対性の問題にかんするあらゆる材料を徹底的に利用すること、しかも『われわれの綱領の原則的な要求に合致して』それを利用することを、われわれの義務とみとめている」(傍点―山本)ことを指摘する。「義務とみとめる」ことは、要するにただ「みとめる」ということだけであって、これはすでにまやかしのうたい文句である。つまり、実際にやることは、これとはまったくちがっているということである。「しかし」という言葉ではじまるのがその真意であって、その本当の狙いと、これにたいするレーニンの懇切でない解説とを、つきにかかげよう。

「しかし」と編集局はつづけて言う。「しかし、絶対主義にたいする闘争の枠内では、そしてとくにこんにちの局面では、自由主義的ブルジョアジーにたいする態度は、彼らになるべく大きな勇気をつけ、社会民主党に指導されるプロレタリアートがかかげるであらう(？ かかげた?) 諸要求に賛成させるといふ任務によって規定される」と。

われわれはこの奇妙な長口舌のとくに奇妙な言葉に傍点をつけておいた。実際、一方の中途半端性の批判や敵対的な利害の分析と、他方の勇気づけ賛成させる任務とを対置しているのを、奇妙なものと呼ばずになんと呼ぼう？ 民主主義の問題における自由主義的民主主義派の中途半端性を容赦なく解明し、それに壊滅的な批判を加える以外に、どんな方法で自由主義的民主主義派を勇気づけることができるのか？ ブルジョア（自由主義的）民主主義派が民主主義派として行動する意図をもち、また民主主義派として行動することをよぎなくされるかぎりには、そのかぎりではブルジョア民主主義派は、不可避免的に、できるだけ広範な人民層に依拠しようと努力する。この努力はかならず、つぎのような矛盾を生む。これらの人民層がひろくなればなるほど、これらの層のあいだには、政治制度と社会制度の完全な民主化を、一般にあらゆるブルジョア支配のひじょうに重要な諸支柱（君主制、常備軍、官僚制）を破壊する恐れのあるほど完全な民主化を要求する、プロレタリア層と半プロレタリア層との代表者がそれだけ多くなる。ブルジョア民主主義は、その本性上これらの要求をみたすことができない。だから、ブルジョア民主主義派は、その本性上不決断と中途半端性の運命を負わされているのである。社会民主主義者は、この中途半端性を批判することによって、たえず自由主義者を押して、プロレタリアと半プロレタリアを、また部分的には小ブルジョアをも、ますます大量に自由主義的民主主義からきりはなして、労働者民主主義の側につかせる。それなのに、われわれは自由主義的ブルジョアジーの中途半端性を批判しなければならないが、しかし（しかし！）彼らにたいするわれわれの態度は彼らを勇気づけるという任務によって規定されるなどと、どのようにしたら言えるのか？ これはあきらかな混乱ではないか。つまり、この混乱は、この混乱の主張者が後退しつつあること、すなわち、自由主義者がまだ公然と登場しておらず、一般に彼らを目ざめさせ、ゆりうごかし、口をひらかせることが必要だった時期に逆もどりしていることを

証明するものか、でなければ、これの主張者が、プロレタリアの勇気をそぐことによって自由主義者を「勇気づける」ことができるという思想に迷いこんでいることを証明するか、そのどちらかである」(前出、四六五―四六六ページ、傍点およびゴシック体―レーニン)。

「ブルジョア民主主義派は、その本性上決断と中途半端性とを運命づけられている」という、レーニンの明確な主張は、すでにドイツおよびオーストリアにおいて歴史的に実証されているものである。それゆえにこそ、「社会民主主義者」は、ブルジョア民主主義派を批判してたえず自由主義者を押しやり、プロレタリアと半プロレタリアを彼らの手から労働者民主主義派の側にうばいとらなければならない。ところが、なんと、この「自由主義的ブルジョアジーにたいする社会民主主義者の態度」は、「彼らを勇気づけるという任務によって規定される」と、新『イスクラ』派・メンシェヴィキは言うのである！ このおどろくべき親ブルジョアの主張は、たんなる思いつきではなく、むしろ新『イスクラ』派・メンシェヴィキの本性そのものを示したものだといつてよい。そこで、右につづくレーニンの論究をみてみよう。

「この思想がどんなに奇怪至極なものであらうと、われわれは、この思想が編集局の手紙のそのつぎの節にもっと明白に表現されているのを見る。「しかし」と編集局はまたまた断わりをならべる、「しかし、強硬な威嚇策によって、いまだちにゼムストヴォあるいはブルジョアの反政府派のその他の機関を強要して、恐慌のあまり、政府にわれわれの要求を提出するという公約をさせることを目的とするなら、われわれは破滅的な誤りにおちいるであらう。このような戦術は、われわれの政治カンパニア全体を反動のための梃子に転化させるであらうから、社会民主主義の名声を台無しにしてしまふであらう」(傍点―編集局)。

これだ！ ツァーリの専制がとくにはつきりと動揺を示しており、大打撃を加えることがとくに必要で、とくに有益となっており、それが決定的な打撃となる見込のあるときに、革命的プロレタリアートはまだツァーリの専制に一回の大打撃をも加えることができないでいる。それなのに、反動のための梃子のことをもぐもぐ言う社会民主主義者がもういるのである。これはもうたんなる混乱ではなくて、あからさまな俗論である。しかも編集局は、反動のための梃子うんぬんというおしゃべりにおあつらえむきに、とくに恐ろしい案山子^{かかし}をでっちあげて、こういう俗論まで口走ったのである。考えてもみたまえ。社会民主党の党組織あての手紙のなかで、ゼムストヴォ議員を威嚇し、彼らを強要して、恐慌のあまり、公約させるといふ戦術が、まじめくさって論じられるとは！ ロシアの大官連のあいだでさえ、わがウグリュム・ブルチェエフ「愚鈍で狭量な高官の典型、ニコライ二世の宮廷側近者を指す」らのあいだでさえ、こんな案山子をほんとうに信じるような乳くさい政治家をみつけることは容易ではあるまい。わが国の革命家のあいだには、熱烈なテロリストがおり、手に負えない爆弾主義者がいるが、この爆弾主義の愚かな擁護者のうちのもっとも愚かな連中でも、こんにちまで、……ゼムストヴォ議員を威嚇して、……反政府派のあいだに恐慌をおこさせることを提案しはしなかったようである。このこっけい千万元案山子をでっちあげ、これらの月並みな文句をならべたてるならば、かならず誤解と困惑を生み、意識をにごらせ、たたかうプロレタリアの頭脳に混乱をまくということが、ほんとうに編集局にはわからないのだろうか？ 反動のための梃子とか、名声を台無しにする威嚇戦術とかいった言葉は、なにもない空間をはこばれていくのではなく、雑草の生長にこのうえなく適したロシアの警察特有の土壌に落ちているのである。いまだこの町の辻にも、実際にわれわれに反動のための梃子のことを話してきかせる人々がいるが、しかしそれを話してきかせるのはノーヴォエ・ヴレーミヤ「反動的な貴族および官僚社会の機関紙」派である。

名声を台無しにする威嚇戦術のことについては、実際にわれわれはみな、耳にたこができるほど聞かされたが、これを話してくれたのは、ほかならぬブルジョア的反政府派の臆病な首領たちである。

教授のイエ・エヌ・トゥルベツコイ公をとってみたまえ。彼は、かなり「開明的」な、そしてロシアの合法的な活動家としては、かなり「大胆な」自由主義者のようである。ところが、彼は自由主義的な『プラーヴォ』『オスヴォボジデーニエ』派の合法機関紙の役割をはたしている週刊法学雑誌（三九号）で「国内の危険」、すなわち過激諸党の危険について、なんと俗悪な議論をしていることであろう。これこそ、ほんとうに恐慌に近い状態にある人の生きた見本である。これこそ、真の自由主義者にほんとうに威嚇的な作用を及ぼしているものはないかという一目瞭然たる実例である。もちろん、彼らは、『イスクラ』の編集者が夢みた計画、すなわちゼムストヴォ議員から革命家に有利な公約をもぎとるという計画（トゥルベツコイ氏にこのような計画を話してきかせるなら、彼は大笑いをはじめただけであろう）をおそれてはいない。——彼らがおそれているのは、「過激」党の革命的・社会主義的な目的である。彼らがおそれているのは、街頭ピラ、つまりブルジョアジーの支配を転覆するまでは、立ちどまらず、武器をおかないプロレタリアートの革命的な自主活動の最初の先きぶれである。この恐怖はこっけい千万な案山子によって生みだされているのではなく、労働運動の現実の性格によって生みだされているのである。この恐怖は、ブルジョアジーの心からぬぐいさりがたいものである（個々の人物や個々のグループは、もちろん計算にいけない）。だからこそ、ゼムストヴォ議員やブルジョアの反政府派の代表者を威嚇するという名声を台なしにする戦術にかんする新『イスクラ』の議論は、きわめて調子はずれにきこえるのである。自由主義者諸君は、街頭ピラをおそれ、制限選挙制憲法をこえるあらゆるものをおそれ、「民主共和国」のスローガンや全人民の武装蜂起への呼びかけをつねにおそれるであろう。し

かし、このスローガンやこの呼びかけをわれわれが拒否することができるという思想そのものを、一般にわれわれの活動にあたってブルジョアジーの恐怖を指針とすることができるという思想そのものを、自覚したプロレタリアートは憤激をもってしりぞけるであらう。

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』をとって見たまえ、それは反動のための梃子を主題にしてどんな優美な歌曲をうたっていることか。第一〇二八五号（十月十八日）の『覚え書』には、つぎのように書いてある。「青年と反動。……この二つの言葉はむすびつかない。ところが、熟慮のたりない行動、衝動的熱中、国家の運命にぜがひでも即時参加したいという願望は、青年をこのような絶望的な袋小路につれていく恐れがある。このあいだヴィボルグ監獄の傍でおこなわれたデモンストレーション、つづいて、じつに首都の中心でなにかのことで示威行進をおこなおうとしたこと、モスクワで二〇〇名の学生が旗をかけた、戦争に反対の抗議をおこないながらねりあるいた事件、……こう見えてくると、反動が生じたのも納得がいく。学生騒動や、青年のデモンストレーション、いったいこれは、りっぱないやがらせではないか。これは切札、反動派の手に入った思いがけない、強力な切札である。これはほんとうに彼らにとつては、貴重な贈り物であつて、彼らはこれを利用する道を心得ているであらう。こんな贈り物をしてはならない。想像上の（!!）鉄柵をうちこわす必要はない。いまだに扉がひらかれている（きつと、ヴィボルグその他の監獄の扉もそうなのだろう？）、しかも大きくひらかれているのだ！」と。

この議論には説明の必要はない。この議論を引用するだけで、こんにち、たたかう労働者にとっては、全ロシア中の監獄のただ一つの扉も細目にすらひらかれておらず、ロシアの人民の敵との真の断固たる格闘の準備に全注意と全努力が向けられていなければならないこんにち、反動のための梃子についてしゃべりだすことがどんなに分別のない

ことであるかを知るのに十分である。もちろん、このような格闘のことを考えるだけで、トゥルベツコイ氏や彼らほども「開明的」でない数千の自由主義者諸君は、恐怖と恐慌の念に駆られる。だが、彼らの恐慌に適應するなら、われわれは馬鹿者であろう。われわれは、自分の勢力の狀態に、人民の激昂と憤激の増大に適應し、專制にたいするプロレタリアートの直接の襲撃が自然發生的な、そして自然成長的な運動の一つにむすびつく時機に、適應しなければならぬのである」(前出、四六六—四六九ページ、傍点レーニン、ゴシック体—山本)。

ここには、きわめて重要な意味をもつ思想が数多くふくまれているが、そのなかから当面緊切な意義をもつとおもわれるものを、すこしくかぞえあげてみよう。

一 この第一節全体をつらぬいているもっとも重要な思想は、「反動のための梃子」というようなことを口走ったリ、これについてあれこれ弁じたること自体が、鼻もちならない俗論であつて、革命的プロレタリアートを墮落させ、毒するものでしかない、ということである。支配階級にたいして仮借ない革命闘争を遂行しつつあり、またその階級敵を強力によつて打倒しなければならぬ当の前衛組織にとつて、「こういう強硬な方策を實行したら、きつと支配階級の側で反動の強化をおしすすめることになり、敵の強圧と弾圧はきびしくなるにちがいない。だから、そうした方策はすべてひかえなければならぬ」などといった主張が、まったく問題になりえないものだということとは、あきらかである。もとより、妥協をゆるさない苛烈な階級闘争、真実の革命闘争にとつては、階級敵を強力によつてうちたおすか、あるいはうちたおされるか、二つに一つしかないのである。階級敵・支配階級は、いつでも、その自由に行けるありとあらゆる力をつかつて、——「平和的・民主的」な力をも、「強力的・独裁的」な力をも動員して——革命的プロレタリアートの強圧と懷柔に必死の努力をかたむけている。食うか、食われるか？、敵をうちたおす

か、味方が敗れるか？ という仮借ない革命闘争において、敵味方以外の第三者を考えて、その第三者がどちらに支持票を投じてくれるか、どちらが第三者のお氣に召すように「正しい態度」をとっているものと認められるかなどということに心をわずらわしたり、そうした第三者——これはつねにほとんど小ブル層である——の支持票を獲得することを主眼として方策をうちだしたりするのは、すでにプロレタリアートの主体的立場を放棄したものであり、階級闘争を裏切るものである。「平和的なたたかい」のなかで第三者の支持票をかきあつめるためには、支配階級が「反動をつよめる」ようなことがあつては、元も子もない。「支配階級が『反動と強圧を強める』ことのないよう、わたしたち『わが党』は『反動のための梃子』となるような『強硬な方策』はひとつとしてやりません。万事『平和で、民主的ルールにそつて』やっています、このルールを犯そうとするのは支配階級であつて、この侵犯と反動化をあえてやる支配階級が悪いんです。だから皆さん、『わが党』を支持して『平和で、民主的ルール』の保証される社会を仲よくつくりあげましょう」——こうした小ブル層好みの「宣伝」に憂身をやつしている「党」は、階級闘争を選挙闘争にすりかえるもの、プロレタリアートの革命闘争を改良闘争にすりかえるものであつて、真正正銘の裏切り「党」といわなければならない。自由主義的ブルジョアジーと小ブル層にもっぱら色目をつかうこうしたブルジョア的改良党の典型として、新『イスクラ』派『メンシェヴィキ』は、いまここでレーニンによって、その面皮をはがれているのである。

二 これにひきかえて、真実の前衛党は、第三者の「審判」など齒牙にもかけず、また「われわれについてくれますます暮しが楽に、豊かになります。明るく、平和的で、民主的な国をつくりましょう」などという猫なで声の「宣伝」などいっさいしりぞけて、はじめから公然と、『過激』党の革命的『社会主義的な目的』をはっきりとかか

げ、「ブルジョアジーの支配を転覆するまでは、けっして立ちどまらず、武器をおくことのないプロレタリアートの革命的な自主活動」を一貫して強力におしすすめるために、真に革命的な宣伝と煽動をやりとげるのである。この革命的な宣伝と煽動のなかには、かならず「民主共和国のスローガン」がふくまれていなければならず、また情勢の進展にとらみあわせて一定の時期には、かならず「全人民の武装蜂起への呼びかけ」を真剣に考慮のうちにいれることがなければならぬ。いいかえれば、階級敵を完全にうちのめすために「人民の敵との真の断固たる格闘の準備に全注意と全努力」とを集中しているものでなければならない。

三 自由主義的ブルジョアジーや小ブル的インテリゲンツィアは、かならず、「強硬な闘争」や「人民の敵との真の断固たる格闘の準備」を目の前にして、「恐怖と恐慌」にとられ闘争から離れようとするものである。だが、彼らの「恐怖と恐慌」を心配して、これに「適応」して彼らをつなぎとめておこうと、あれこれ心をわずらわすのは、正真正銘の「馬鹿者」か、はじめから階級闘争を放棄している奴隷根性の小ブル的政治屋か、そのどちらかである。真の革命党がびったりと「適応」しなければならないのは、自由主義的ブルジョアジーや小ブル層、とくに小ブル的インテリゲンツィア層の「反政府的」気分や動向などではけっしてない。それは、まさに「勤労人民の激昂と憤激の増大」に「適応」し、「階級敵にたいするプロレタリアートの直接の襲撃が自然発生的な、そして自然成長的な運動の一つにむずびつく時機」にこそ「適応」しなければならないのである。

四 「革命家のあいだには、熱烈なテロリストがあり、手に負えない爆弾主義者」がいるものであるが、「この爆弾主義の愚かな擁護者のうちのもっとも愚かな連中でも」、「反動のための梃子」とか「名声を台なしにする威嚇戦術」とかいったことを「もぐもぐいう自称共産主義者」にくらべれば、ずっとましなものである。もちろん、「テロ

リスト」、「爆弾主義者」たちは、追いつめられた小ブル層の反抗の無意識的・衝動的体现者でしかなく、彼らの個人主義的・無政府主義的行動は、前衛党による革命的人民の隊伍の階級闘争の遂行にとって、マイナスにこそなれ、プラスするところはひとつもない。だが、ただひとつ、現在の「奴隸制」＝階級支配と絶對的にあいられないものであって、強力にうったえてもこれを打倒しようとする真剣にかんがえ、そのために一身を犠牲にしかえりみないという点だけについていえば、プロレタリアートの階級闘争の立場からみて、それ相当の意義をみとめることができるといわなければならないであろう。とくに、彼らには、「反動のための梃子」のことを「もぐもぐいう自称共産主義者」とちがって、仮借ない革命闘争を改良主義的な選挙闘争にすりかえたり、プロレタリアートの階級闘争を日和見主義的改良闘争にすりかえたりして、革命の大業を階級敵に売り渡すような、あくどいやり方はみられないのである。それゆえ、真実の前衛党であるならば、彼ら「テロリスト」にたいして、「反動のための梃子」をつくりだす「階級敵」としてひたすら非難・攻撃することを断固しりぞけて、彼らの思想および行動の客観的本質を徹底的に批判し、正しい革命闘争における自覚的分子の一員となるための道を指し示し、そのために、理論上および実践上での闘争を遂行することができるとでなければならぬ。「無政府主義的過激分子」と日和見主義的「共産主義者」とを峻別し、前者にたいしての闘争と後者の裏切分子にたいする闘争とを明確に区別し、これら本質的にことなつた二つの闘争を効果的に、かつ徹底的にやりぬいていくところに、真実の革命党の真価が存するといわなければならない。

右の第一節につづいて、レーニンは、第二節において、『イスクラ』編集局の議論の「もう一つの特徴」をとりあげて、これに的確な批判を加えている。その内容は、右の第一節における所論に直接結びついているものであり、むしろ、これを補足するものといふことができる。そこで、そのなかから当面とくに重要とおもわれる箇所を、つぎに

抜粋してかかげておくことにしよう。

「編集局は、「政府にわれわれの要求を提出するという公約」をゼムストヴォ議員からもぎとることを目ざすという、評判を台なしにする戦術に食ってかかった。さきにあげた矛盾を別にしても、この場合、「われわれ」の要求、すなわち労働者民主主義の要求を、自由主義的民主主義派が政府に提出すべきであるという思想そのものが、奇妙である。一方では、自由主義的民主主義派は、まさにそれがブルジョア民主主義派であるという理由で、「われわれ」の要求をけっして自分のものにする事ができず、それを心から、首尾一貫して、断固として擁護することができない。かりに自由主義者がわれわれの要求を提出するという公約を与えたとしてさえ、しかも「自発的」にあたえとしてさえ、もちろん彼らはこの約束を守らず、プロレタリアートを欺くであろう。他方では、もしわれわれが、一般にブルジョア民主主義派に、とくにゼムストヴォ議員に重大な影響をおよぼすほど有力なら、われわれの要求を自主的に政府に提出するのになったく十分であろう。

編集局のこの奇妙な思想は言いあやまりの結果ではなくて、同編集局が総じてこの問題についてとってきた混乱した立場の避けられない結果である。聞きたまえ。「ブルジョア的」反政府派に力強く組織的に働きかける……という実践的任務が、中心点となり、導きの糸と……ならなければならない。「自由主義的」反政府派の当該の機関にたいする労働者の声明の草案」には、「労働者が政府に訴えずに、ほかならぬこの反政府派の代表者の議會に訴えるのはなぜか」ということの説明」がなければならない、と。任務をこのように提起することは、根本的にまちがっている。われわれ、プロレタリアートの党は、もちろん、「住民のあらゆる階級のなかにはいつて行き」、全人民のまえてわれわれの綱領とわれわれの当面の要求とを公然と精力的に擁護しなければならない。われわれは、これらの要求をゼムスト

ヴォ議員のまえでも声明するようつとめなければならないが、われわれにとって中心の焦点となり導きの糸となるべきものは、まさにゼムストヴォ議員にたいする働きかけではなくて、政府にたいする働きかけである。『イスクラ』編集局は中心の焦点をあべこべに立てている。ブルジョアの反政府派は、それが自分ではたたかわず、無条件にまもりぬくべき自分の綱領をもたず、両交戦当事者（政府と革命的プロレタリア、プラス、その味方である少数のインテリゲンツィア）のあいだに立ち、闘争の成果を自分のために利用するからこそ、たんにブルジョア的なたんなる反対派なのである。だから、闘争が白熱したものにねばなるほど、決戦の時機が近づけば近づくほど、ますますわれわれは、われわれの注意と働きかけをわれわれの本当の敵に向けなければならず、……疑いもなく条件づきの、疑わしい、たよりにならない、中途半端な同盟者であるこの同盟者に向けてはならないのである。この同盟者を無視することとは分別を欠いたことであらうし、この同盟者を恐れさせ、おどかすことを目的にするのは愚かなことであらう。――すべてこういうことは、それを論じるのが奇妙なくらい、自明なことである。しかし、われわれの爆動の中心の焦点となり、導きの糸となるべきものは、くりかえしているが、この同盟者にたいする働きかけではなくて、敵との決戦の準備である」（前出、四六九―四七〇ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本）。

「政府にたいする働きかけでなくて、ゼムストヴォにたいする働きかけを中心の焦点としてもちだすことは、スタロヴェルの決議の基礎⁽⁸⁹⁾となっていた不幸な思想、すなわち、自由主義者とのなんらかの「協定」の基盤をただちに即座にさがしもとめるという思想に、当然に導く。編集局は、その手紙のなかでつぎのように述べている。「こんにちのゼムストヴォにたいするわれわれの任務は、ゼムストヴォが人民の名において行動し、かつ労働者大衆の精力的な支持を期待するせめて多少の権利でももつためには、せひとも支持しなければならないような、そういう革命的プロレ

タリートの政治的諸要求を、ゼムストヴォに提出することに帰着する(!!)」と。まったく、労働者党の任務のまことに結構な規定である！穩健なゼムストヴォ議員と政府とが、革命的プロレタリアにたいする闘争のために、同盟する可能性と公算とがあること(編集局自身もこういう同盟の可能性をみとめている)が、われわれのまゝに、完全に明白に現われているときに、われわれは自分の任務を、政府にたいする闘争力を十倍にすることに「帰着させ」ずに、自由主義者との相互援助協定の決疑論的な諸条件の作成に「帰着」させるといふのだ。もし、他人が私の支持を要求する権利をもつためにはぜひとも支持しなければならないような諸要求を、私が他人にもちだすなら、私はまさしく協定をむすぶのである」(前出、四七一ページ、傍点―山本)。

(89) スタロヴェルはメンシェヴィキの指導者、ポトレソフの仮名である。「スタロヴェルの決議」とは、ロシア社会民主労働党第二回大会の席上、「自由主義者にたいする態度にかんするブレハーノフの決議案」に對抗して提案され、大会で採択された「自由主義者にかんするスタロヴェルの決議」のことである。「スタロヴェルの決議」の内容や大会での論争経過については、レーニンがその労作『一歩前進、二歩後退』のなかで簡潔な説明をあたえている。メンシェヴィキの一貫した革命的・日和見主義的本質をより明確にとらえるためのひとつの素材として、つぎにまず「ブレハーノフの決議案」を引用し、ついで、「スタロヴェルの決議」についてのレーニンの論評を右の著書のなかから引いてかかげておくことにしよう。

〔ブレハーノフの決議案〕

「(イ) 社会民主党は、ブルジョアジーがツァーリズムとの闘争で革命的であるか、あるいはすくなくとも反政府的であるかぎりでは、ブルジョアジーを支持しなければならないこと、(ロ) だから、社会民主党はロシアのブルジョアジーの政治的意識の目ざめを歓迎しなければならないこと、だが他方、ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さとを、どこであろうとそれが現われたところで、プロレタリアートのまゝに暴露しなければならないことを考慮し、——ロシア社会民主労働党第二回定例大会は、すべての同志にたいし、その宣伝で、ベ・ストルーヴェ氏の機関誌に現われた傾向の反革命的・反プロレタリア的な性格に労働者の注意を向けさせるように切に勧告する」(ゴシツク体―山本)。

〔「スタロヴェルの決議」についてのレーニンの批判〕

「その決議は、大会によって採択されたが、それは、この決議の署名から判断できるように、「多数派」の三名の味方（ブラウン、オルロフ、オシポフ）がこの決議にもブレハーノフの決議にも賛成し、この両者のあいだには和解させようのない矛盾があるのに気がつかなかったためである。ちょっとみると、両者の間には和解させようのない矛盾などはないようである。というのは、ブレハーノフの決議は、一般的な原則を確定し、ロシアにおけるブルジョア自由主義にたいする一定の原則的な、かつ戦術的な態度を言いあらわしているが、スタロヴェルの決議は、「自由主義的または自由主義的『民主主義的諸潮流』」との「一時的な協定」がゆるされる具体的な諸条件を規定しようと、試みているからである。二つの決議の主題は別個のものである。だが、スタロヴェルの決議は、ほかならぬ政治的あいまいさという欠陥をもっていて、それゆえに些末な、つまらないものである。この決議は、ロシアの自由主義の階級的内容を規定していない。それは、この階級的内容を表現する特定の政治的諸潮流をしめしていない。それは、これらの特定の潮流にたいするプロレタリアートの宣伝と煽動の基本的諸任務をプロレタリアートに説明していない。それは（そのあいまいさのために）、学生運動と『オスヴォボジデーニエ』というような、ちがった事柄を混同している。それは、「一時的な協定」のゆるされる三つの具体的な条件を、あまりにもこまごまと、決疑論的に、指示している。政治上のあいまいさは、この場合にも、他の多くの場合と同じように、決疑論に導いている。一般的原則の欠如や、「条件」をかぞえあげようとする試みは、これらの条件をこまごまと、厳密に言えば、まちがって指示する結果に導いている。実際、スタロヴェルのこの三つの条件をしらべてみたまえ。（一）「自由主義的、または自由主義的『民主主義的諸潮流』は、専制政治とのその闘争において、断固としてロシア社会民主党に味方することを、はっきり、明確に声明」しなければならない、と。自由主義的諸潮流と自由主義的『民主主義的諸潮流』との違いはどのような点にあるのか？ 決議は、この間にこたえる材料をなにもあたえていない……………」

第二の条件、すなわち、もしこれらの諸潮流が「その綱領のなかに、労働者階級や一般に民主主義の利益と相容れない要求、あるいは彼らの意識をくもらせる要求をかげない」ならば、という条件。ここにもまた同じ誤りがある。労働者階級の利益とあいられない要求をその綱領のなかにかかげず、その（プロレタリアートの）意識をくもらせないような自由主義的『民主主義的諸潮流』はかつてなかったし、またありえない……………」

最後に、同志スタロヴェルの第三の「条件」（自由主義的民主主義者は、普通・平等・秘密・直接の選挙権をその闘争のス

ローガンとせよ、という)もまた、ここで提起されているような一般的な形では正しくない。制限選挙制の憲法、一般に「切りちめられた」憲法のスローガンをかかげている自由主義的「民主主義的諸潮流との一時的で、部分的な協定は、どんな場合にもゆるしえない、と宣言することは、愚かなことであろう。実質上、「オスヴォボジデーニエ派」の諸君の「潮流」はまさにこれにあたるであろうが、しかし、たとえもっとも臆病な自由主義者であろうと、「一時的な協定」をむすぶことを、まえもって禁止して、自分の手をしばることは、マルクス主義の原則と一致しない政治的な近視であろう。

総括。同志マルトフも同志アクセリロードも署名している同志スタロヴェルの決議は、まちがっている。だから、第三回大会がそれを廃棄するのが合理的な行動であろう。この決議は、理論的立場と戦術的立場とが政治的にあいまいだという欠陥をもっており、この決議が要求している実践的な「諸条件」は決疑論的だという欠陥をもっている。決議は二つの問題を混同している。(一)あらゆる自由主義的「民主主義的潮流の」「反革命的」「反プロレタリア的な」諸特質の暴露およびこれらの特質とたたかう義務と、(二)これらの潮流のうちのどれかと一時的で部分的な協定をむすぶ条件とを混同しているのである。それは必要なもの(自由主義の階級的内容の分析)をあたえずに、必要でないもの(「条件」の指示)をあたえている。特定の交渉当事者——こういう考えうる協定の主体——すら現にないのに、一時的な協定の具体的な「条件」を党大会でつくりあげるのは、総じて愚かなことである……………。

プレハーノフの決議にたいする「少数派」の異議についていえば、同志マルトフのただ一つの論拠はこうであった。プレハーノフの決議は、「一文筆家を暴露しなければならぬ、という哀れな結論でおわっている。これは『斧で蠅に打ち』かかることではなかろうか?」と。この論拠——そこでは、思想の欠如が「哀れな結論」という辛辣な言葉でおおいかくされている——は、仰々しい空文句の新しい見本をわれわれに提供している。第一に、プレハーノフの決議は、「ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さとを、どこであろうとそれが現われたところで、プロレタリアートのまえに暴露する」と言っている。だから、「ストルーヴェ一人に、一自由主義者に、全注意を向けなければならないのだ」という同志マルトフの主張は、まったくくだらないものである。第二に、ロシアの自由主義者との一時的な協定が可能かどうかということが問題となっているときに、ストルーヴェ氏を「蠅」とくらべるのは、初歩的な政治上の自明の真理を、辛辣な言葉の犠牲にしようことを、意味する。そうではない、ストルーヴェ氏は蠅ではなく、政治的にひとかどの人物である。そして、彼がひとかどの人物であるのは、彼個人が非常な大人物であるからではない。政治的にひとかどの人物としての意義を彼に与えているのは、彼

の立場、すなわち、非合法の世界におけるロシア自由主義の唯一の代表者、いくらかでも行動能力のある、組織された自由主義の唯一の代表者であるという立場である。だから、ロシアの自由主義者や、彼らにたいするわが党の態度について述べながら、ほかならぬストルーヴェ氏を、ほかならぬ『オスヴォボジデーニエ』を考えにいれないということは、なにもはなさないためにものを言うことである」（前出、三〇三—三〇七ページ、傍点レーニン）。

この終りに出てくるマルトフの名言句——「斧で蠅を打つ」——をとくと鑑賞していただきたい。この、めざましい空文句は、「初歩的な政治上の自明の真理」をしつかりとらえることができないにもかかわらず、政治的組織のなかでなんとか「指導的」地位にありついていたという、野心的政治家屋が、その「權威」をなんとかしてでっちあげようとしてやたら連発するものである。トロツキーが「大げさな大言壮語」と「空文句の羅列」で党内に確固不動の「名声」を馳せたのは、多分彼の「親方」マルトフからの直伝に負うところが多大であったとみられるのであって、彼トロツキーが相当の年月にわたってマルトフにくつついてはなれられなかった理由のひとつは、この辺にあるといつてよい。

「彼らが人民の名において行動するせめて多少の権利でももつためには、ぜひとも支持しなければならない」ような政治的諸要求を、自由主義的民主主義派、すなわち、ゼムストヴォ議員に提出する任務を労働者党に提起するということとは、総じて原則的に正しいものとみとめることができるであろうか？ いや、任務をこのように提起することは原則的にまちがいであって、プロレタリアートの階級的自覚をくもらせ、まったく無益な決疑論に導くにすぎない。人民の名において行動することは、まさに民主主義者として行動することを意味する。どの民主主義者（ブルジョア民主主義者をもふくめて）も、人民の名において行動する権利をもっているが、しかし民主主義者がこの権利をもつのは、彼が首尾一貫して、断固として、最後まで民主主義を遂行するかぎりにすぎない。したがって、どのブルジョア民主主義者も「人民の名において行動するせめて多少の権利でももっている」（なぜなら、どのブルジョア民主主義者も、彼が民主主義者であるかぎりは、あれこれの民主主義的要求を擁護するからである）が、同時にまたプ

ルジョア民主主義者はだれひとり、全線にわたって人民の名において行動する権利はもたない（なぜなら、現在では、ブルジョア民主主義者はだれひとり、民主主義を断固として最後まで遂行する能力がないからである）。ストルーヴェ氏は、『オスヴォボジデーニエ』が専制と闘争するかぎり、人民の名において行動する権利をもっている。ストルーヴェ氏は『オスヴォボジデーニエ』がぬらりくらりとふるまい、言を左右にし、制限選挙制憲法に限定し、ゼムストヴォの反政府運動を闘争と称し、首尾一貫した、明白に民主主義的な綱領を回避するかぎり、人民の名において行動するなんの権利ももっていない」（前出、四七二—四七三ページ、傍点—レーニン）。

以上からひきだしてくる第二節の結論部分は、つぎのとおりである。

「こういうわけで、自由主義ブルジョア諸君が人民の名において行動するせめて多少の権利でももつために支持しなければならぬような諸要求を彼らに提出するという任務を労働者党に提起することは、無意味で、愚かな任務をあたふたすることを意味する。われわれは、自分の綱領のなかに述べている要求のほかには、どんな特別の民主主義的要求をあみだすにもおよばない。われわれは、この綱領の名において、民主主義を遂行するかぎり、あらゆる民主主義者（ブルジョア民主主義者をもふくめて）を支持する義務がある。われわれは、民主主義から後退する（たとえば、共同体からの脱退の自由や農民が土地を売る自由についての問題であろうと）かぎり、あらゆる民主主義者（社会革命派をもふくめて）を容赦なく暴露する義務がある。いわば卑劣行為の許容限度をまえもって規定しようところまいること、また民主主義者は、民主主義者として行動するせめて多少の権利でももつために、民主主義からのどんな後退なら許されるかを、まえもってきめようと試みることは甚だ知恵のいる課題なので、わが編集局がこの課題をあみあげるにあたっては、同志マルティノフまたは同志ダンがこれをたすけたのではないかという疑いが、おもわず

しらずうかんでくる」（前出、四七三ページ、ゴシック体―山本）。

ここに書かれている「同志マルトイノフ」は、さきに本論稿の第十八節で指摘したように、経済主義者の頭領で、『ラボーチェエ・デーロ』の編集局員であり、第二回党大会では、メンシェヴィキの「総指揮官」マルトフの「片腕」となり、その後メンシェヴィキの指導的諸機関誌の編集者の一人として活躍したものの、「同志ダン」もまた、同じくメンシェヴィキの指導者のひとりとして、一九〇五―一九〇六年にはメンシェヴィキの一連の新聞の編集にあたったものである。それゆえ、レーニンがここで「同志マルトイノフまたは同志ダンがこれをたすけたのではないかという疑い」と述べているのは、事実両名の実質的指導のもとに『イスクラ』編集局の手紙『党员のために』が作成されたものであることを知って、この事実を婉曲に指示したものとおもわれるのである。

（90） 本誌第二十五卷第四号、四七ページ、参照。

ところで、『党员のために』のなかで、とくにメンシェヴィキの政治的立場を浮き彫りに示しており、また同じく現在わが国の「前衛党」の政治的立場を判断するうえでもことに貴重な示唆に富んでいるのは、このレーニンの論文の第三節でとりあげられているところの、『イスクラ』編集局の作成したいわゆる「大計画」なるものの内容である。われわれは、資料の制約があるため、レーニンの論文によってこれをうかがうこととし、まずこの論文の第三節の最初の部分をつぎに引用してみよう。

「県ゼムストヴォ議会は憲法を請願する。N・X・Yの各都市では、委員会メンバー、プラス、すすんだ労働者が「アクセリロード流の」政治カンパニア計画を作成する。煽動の中心的焦点は、ブルジョアの反政府派にたいする働きかけに帰着する。組織グループが選出される。組織グループは執行委員会を選出する。執行委員会は特別の演説者

を選出する。「大衆をゼムストヴォ議會に直接に接觸させ、ゼムストヴォ議員が會議をひらいている、その建物の付近に示威行進を集中」するようにつとめる。「デモ参加者の一部は議場におしり、適当な瞬間に、特別にそのための全権を委任された演説者を介して、労働者の声明書を議會にむかつて読みあげる許可をこの議會に」(? 議會で議長をつとめている貴族会長に?)「ねがう。これが拒絶された場合には、演説者は、人民の名において語っている議會がこの人民自身の眞の代表者の声を聞きたがらないことにたいする抗議を大声で声明する」。

以上が、新『イスクラ』の新計画である。編集局自身がこの計画の意義をどんなに控え目に評価しているかは、われわれはすぐ見るであろうが、その前に、執行委員會の機能にかんする編集局のひじょうに原則的な説明を引用しておこう。

……「執行委員會は、ゼムストヴォ議員が會議をひらいている建物のまえに数千の労働者が現われ、また建物そのもののなかに数十もしくは数百の労働者が現われたために、ゼムストヴォ議員が大恐慌をおこすことのない(!!)よう、あらかじめ措置をとらなければならないであろう。このような恐慌に駆られると、彼らは警察官やカザツクの恥ずべき保護のもとに身を投げ(!!)、こうして平和な示威行進をみにくい喧嘩と野蛮な殴りあいに変え、この行動の趣旨全体をねじまげかねないからである」。……(みたところ、編集局自身は、自分で夢想した案山子を信じていたようである。この文句の文字どおりの文法上の意味からすると、編集局は、ゼムストヴォ議員が示威行進を殴りあいに変え、その趣旨をねじまげるかのようにさえ考えている。自由主義的なゼムストヴォ議員にたいするわれわれの評価は甚だ低いものではあるが、それでもゼムストヴォ議會の自由主義者が警察とカザツクを呼びよせるということで、編集局が大恐慌をきたしているのは、われわれにとっては、まったくばかげてみえる。一度でもゼムストヴォ議

会を見たことのあるものならだれでも、いわゆる秩序紊乱の場合には、議長をつとめる貴族会長か、隣室に非公式につめてゐる警察官かが警察を呼びよせることを、よく知つてゐる。それとも、ひよつとすると、執行委員会委員は、この場合平和な示威行進を野蛮な殴り合いに変えることは、新『イスクラ』編集局の「計画」には全然はいつていないことを分区分主任警部に説明するであらうか？）

……「こうした不慮の出来事を避けるために、執行委員会は、準備中の示威行進やその真の目的を、自由主義的な議員に……」（彼らにカザックを呼びよせないという「公約」をさせるために？）「まあもつて予告しておかなければならない……」（すなわち、われわれの真の目的は、われわれが野蛮になぐられ、それによつてアクセリロードの計画の趣旨がねじまげられることではけつてないことを、予告しなければならぬ）。「……そのほか執行委員会には、反政府ブルジョアジーの左翼の代表者とする種の協定」（ききたまえ！）「をむすび、われわれの政治行動にたいする彼らの積極的な支持ではないまでも、すくなくとも同情を確保するように試みなければならない。執行委員会には、彼らとの交渉を、もちろん党の名において、労働者のサークルや集会の委任を受けて、おこなわなければならない。これらのサークルや集会では、政治カンパニアの一般的計画が審議されるばかりでなく、このカンパニアの進行についても報告がなされる。——もちろん、秘密活動の諸要求を厳守したうえでのことだが」。

そうだ、そうだ、厳密に規定された条件にもとづいて自由主義者と協定するというスタロヴェルの大思想が、日ごとどころか、一時間ごとに成長し、つよまつていくのが、まざまざと見える。なるほど、これらの明確な条件はみな「一時」棚あげされてはゐるが（われわれは形式主義者ではない！）、しかしそのかわりに協定は實際に達成される。しかも即時達成される。それは、大恐慌をおこさないことについての協定である」（前出、第七卷、四七四—四七五）

ページ、傍点および（！）レーニン）。

ここにレーニンによって引用されている「大計画」の説明の一端を読んだだけで、新『イスクラ』編集局、すなわちメンシェヴィキの指導層の立場と考え方が、どんなにプロレタリア的革命主義からはなれたものであるか、どんなにそれがブルジョア自由主義派の後尾としてうつつけのもの、つまり骨の髄からの小ブル的日和見主義に根づいたものであるかということが、よくわかる。このことはまた、行間に（ ）をもって挿入されているレーニンの評語によっても適切に示されている。だが、レーニンは、たんに「大計画」の内容に批判を加えるだけではなく、これにたいして正しいプロレタリア的革命主義の闘争方法を明示することによって、メンシェヴィキの路線の階級的性格とポリシェヴィキの路線のそれとの全く相容れない根本的対立をこのうえもなく的確に示している。こうしたメンシェヴィキ指導層に固有の追隨的日和見主義修正主義路線をば独特の「空文句」と「大言壮語」とをもって精力的に宣傳してまわったのが、ほかならぬわがトロツキーそのひとであって、右につづくレーニンの説明のなかで、彼トロツキーはちゃんと然るべき地位をあたえられるという、名誉を担っているのである。そこで、いささか長きにすぎるうらみはあるが、右につづくレーニンの説明をかかげることにしよう（レーニンがその引用個所のなかで（ ）をつけて述べているのはレーニン自身の評語である）。

「編集局の手紙をどんなにひねくりまわしてみても、諸君はそのなかに、われわれが右にあげたものよりほかには、自由主義者との悪名高い「協定」のどういう内容も見いださないであろう。それは、自由主義者が人民の名において行動する権利をもつ条件にかんする協定であるか（そのばあいには、このような協定という考えそのものが、この考えを提出する社会民主主義者の名声をもっともひどく台なしにするであろう）、あるいは大恐慌をおこさないという

協定、平和な示威行進に同情するという協定であるか——このばあいには、これは、まじめに論じることが困難なま
ったくのナンセンスである——、どちらかである。政府ではなく、ブルジョアの反政府派にたいして働きかけること
に中心的な意義をみとめる愚かな思想は、もとより、ナンセンスよりほかにはなにものをももたらすことはできな
かった。もしわれわれが、ゼムストヴォ議会の議場で、労働者の威圧的な大衆的デモンストレーションをおこなうこ
ができるなら、もちろんわれわれは、それをおこなうであろう（もっとも、大衆的デモンストレーションをおこなう
勢力が現にあるばあいには、これの勢力をゼムストヴォ議会の「建物の付近」に「集中」するのではなく、警察官な
り、憲兵なり、もしくは検閲官が会合をひらいている「建物の付近」に「集中」するほうが、はるかによいであろ
う）。しかし、このばあいには、ゼムストヴォ議員が大恐慌をきたしはしないかという考慮を指針とし、これにつ
いて交渉をおこなうことは、愚の骨頂であり、喜劇の絶頂である。一貫した社会民主主義者の演説の内容、そのものが、
ロシアのゼムストヴォ議員のかなり多くの人々のあいだに、多分その大多数のあいだに、つねにならず、大恐慌を
ひきおこすであろう。このよう、大恐慌が望ましくないことについてゼムストヴォ議員とまえて話しあうこと
は、自分をまったくも誤った、不面目な地位におくことを意味する。さらにまた、別の種類の大恐慌も、野蛮な殴りあ
いによって、もしくはこうした殴りあいがおこるかもしれないと考えることによって、不可避的にひきおこされるで
あらう。その大恐慌についてゼムストヴォ議員と交渉をおこなうことは、はなはだ愚かなことである。なぜなら、ど
んなに穩健であっても、自由主義者のだれひとりとして、殴りあいをひきおこもしなければ、それに共鳴もしない
であらうが、このことは、全然彼らにかかっていることではないからである。ここで必要なものは、「交渉」ではな
く、**実際に力を準備することであり、ゼムストヴォ議員に働きかけることなく、まさに政府とその手先に働き**

かけることである。もし力がないなら、そのときは大計画について駄弁を弄さないほうがよいし、もし力があるなら、そのときはまさにその力をカザックと警察に対置させるべきであり、群衆がカザックや警察の襲撃を撃退するか、あるいはすくなくともそれを食いとめることができるような場所にも、このような群衆を集結するように努力すべきである。そしてもし、われわれが口先きではなく、実際に、「ブルジョアの反政府派に威圧的に組織的に働きかける」ことができるのであれば、もちろん、それは、大恐慌をおこさないことにかんする愚劣な「交渉」によるものではなく、ただ力によるのであり、カザックとツァーリの警察にたいする大衆的反撃の力、人民蜂起に移行できる大衆的襲撃の力によるのである。

新『イスクラ』編集局は、物ごとをこれとちがったふうに見ている。編集局は、協定をむすび交渉をおこなうという自分の計画にひじょうに満足しているので、それをどんなに感嘆し、礼讃してもしきれないほどである。

……積極的なデモ参加者は、「警察または一般に政府にたいする普通のデモンストレーションと、この（傍点―編集局）瞬間における自由主義的分子の政治的戦術にたいする革命的プロレタリアートの直接の働きかけ（そのとおり！）の助けをかりて、絶対主義と闘争することを直接の目的とするデモンストレーションとの、根本的なちがいをとつくりと理解して」いなければならない。……「普通の、いわば一般民主主義的な（!!）型のデモンストレーション、すなわち、革命的プロレタリアートと自由主義的・反政府的ブルジョアジーとを、二つの独立の政治勢力としてたがいに具体的に対置することを直接の目的としないデモンストレーションを組織するためには、人民大衆のあいだに強力な政治的動揺があるだけで十分である」。……「わが党は、大衆のこの気分を、絶対主義にたいするこれらの大衆のこのような——こう言えるのであれば——もっとも低い型（謹聴！ 謹聴！）の動員のためであろうと、利用

する義務を負っている」。……「われわれは、政治活動の新しい（！）道、社会生活における労働者大衆のつぎのような計画的干渉（注意）を組織する道に、最初の（！）数歩を踏みだしつつある。それは、労働者大衆を、その階級的利害からしてブルジョアの反政府派に対立すると同時に、また共通の敵との精力的な共同闘争のための条件（どんな！）を、この反政府派に提出する自立的な勢力として、反政府派に対置させることを直接の目的とする干渉である」。

だれもがこの注目に値する議論の深遠な意味をあまさず理解することができない。ロストフのデモンストレーションのときには、何千もの労働者のまえで、社会主義の目標と労働者民主主義の諸要求とが明らかにされたのであるが、これは、「もっとも低い型の動員」であり、また普通の一、般、民、主、義、的、な型であって、ここには、革命的プロレタリアートとブルジョアの反政府派との具体的な対置はない。ところが、委員会のメンバーと積極的な労働者が形づくる組織グループの選出した執行委員会が任命した、特別全権を委任された演説者が、ゼムストヴォ議員と予備交渉をしておいてから、自分の言うことを聞きたがらないことについてゼムストヴォ議会で大声で抗議を声明するならば、これは二つの独立した勢力を「具体的」に「直接」に対置することであり、自由主義者の戦術への「直接」の働きかけであり、「新しい道への第一歩」であるであろう。諸君、神をおそれるがいい！『ラボーチェ・デーロ』の最悪の時期におけるマルトイノフだって、けっしてこれほどの俗論は吐かなかったではないか！

南部ロシアの諸都市の街頭でひらかれた大衆的な労働者集会、数十人の労働者の演説者、ツァーリの専制の現実の力との直接の衝突——これは「もっとも低い型の動員」である。われわれの演説者が自由主義者諸君のあいだに恐慌をおこさせない義務を負っておだやかな演説をすることについてゼムストヴォ議員と協定すること、これが「新しい

道」である。これが、編集局のバラライキンを通じて鳴物入りで全世界に吹聴された、新『イスクラ』の新しい戦術的任務、新しい戦術的見解なのだ。しかし、ある一点でこのバラライキンは、おもわずしらず真実をしゃべってしまった。それは、旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには、実際に深淵がある、ということである。旧『イスクラ』は、お膳立てした階級間の協定を「新しい道」とみて夢中になりうるような人々にたいしては、軽蔑と嘲笑の言葉以外の言葉をもっていなかった。この新しい道は、フランスやドイツの社会主義「政治家」の経験からすでにとつくの昔にわれわれの知っているものである。彼らもまた、古い革命的戦術を「もつとも低い型」とみなしており、労働者の演説者が反政府的ブルジョアジーの左翼と交渉しておいてから、おだやかに、控え目に演説するという協定の形で、「社会生活に計画的に、直接に干渉」することについて、いくら自讃しても自讃しきれずにいるのである。

自由主義的ゼムストヴォ議員の大恐慌をまえにして、編集局のほうもひどい大恐慌をきたして、自分の案出した「新しい」計画の参加者に「とくに慎重」であるように熱心にすすめている。編集局の手紙にはこう書いてある、――「われわれは、この行動そのものをおこなうさいの環境について対外的に慎重を期する趣旨で、やむをえない場合には、労働者の声明書をゼムストヴォ議員の家に郵送したり、それをかなりな部数でゼムストヴォ議会の議場にばらまくことを考えている。ブルジョア革命主義（そのとおり！）の見地に立つものは、これに狼狽するかもしれない。というのは、このブルジョア革命主義にとっては、外面的な効果がすべてで、プロレタリアートの階級的自覚と自主活動との計画的な発展の過程は無なのである」。

もともとわれわれの間は、ピラを方々におくったり、ばらまいたりすることには狼狽しないが、きらびやかで無内容の言葉にはいつでも狼狽する。ピラを方々におくったり、ばらまいたりすることを、プロレタリアートの階級的

自覚と自主活動の計画的な発展の過程であると、まじめくさった顔つきで説くには、ひとりよがりの俗論の英雄とならなければならぬ。新しい戦術的任務について全世界にむかつてさげびたてながら、ピラを方々におくったり、ばらまくことに問題を帰着させることは、まことに無類であり、わが党内のインテリゲンツァの色合いの代表者にとつてきわめて特徴的である。彼らは、組織上の新しい言葉で大失敗したのち、いまや戦術上の新しい言葉をヒステリ的に追っかけまわしている。しかもなお彼らは、もぢまへの控え目さで、外面的な効果の空虚なことを説いている。紳士諸君、ゼムストヴォ議員諸公のまえでの労働者の演説によつては、もつともうまくいった場合でも、つまり君たちの自称新計画が完全に成功した場合でも、まさしく外面的な効果しか達成されないが、他方、このような演説が「自由主義分子の戦術」に実際に「威圧的」な働きかけをおよぼすなどと言うのは、お笑い草でしかないというところが、諸君には本當にわからないのか？ その反対ではないのか、つまり、諸君には「普通の、一般民主主義的な、もつとも低い型」のデモンストレーションのようにみえる労働者の大衆的デモンストレーションが、自由主義分子の戦術にたいして実際に威圧的な働きかけをおよぼしたのではなかったか？ もし、もう一度ロシアのプロレタリアートが自由主義者の戦術に働きかけをおよぼす運命にあるなら、彼らはゼムストヴォ議員との協定によつてでなしに、政府にたいする大衆的襲撃によつて、それをおよぼすであらうことを、信じるがいい」（前出、四七五―四七九ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本）。

ごらんのように、新『イスクラ』派「メンシエヴィキの「大計画」は、もつぱらブルジョア自由主義派にたいする「働きかけ」を主眼とするもので、それはゼムストヴォ議会で声明書を読みあげること、そのために反政府的ブルジョアジー＝自由主義派と「協定」を結ぶこと、ということに帰着する。労働者大衆のデモンストレーションもおこ

なわれるが、それはもっぱらゼムストヴォ議会の建物の付近に集中されて、ゼムストヴォ議員が大恐慌をおこさないかぎりでおこなわれる。つまり、労働者大衆のデモンストレーションは、ブルジョア自由主義派との「協定」による議会声明のための、いわば「刺身のつま」にすぎない。このブルジョア自由主義派のゼムストヴォ議員たちが大衆的デモで大恐慌を来さないようにけんめいにそのための工作を説明しているあたりは、完全なブルジョア的政治屋の本領を示しているものである。こうした新『イスクラ』＝メンシェヴィキの「大計画」にたいして、レーニンが「愚の骨頂」、「喜劇の絶頂」というまことに辛辣な批評をくだしたのは、このうえもなく適切なものといわなければならぬ。彼らメンシェヴィキは、この世紀的茶番劇をみずから演ずることについて、精々気どった左翼的空文句でこれを飾りたて、彼ら自身をもっとも誤った、もっとも不面目な地位にあることを世間にさらけ出すことをあえてやりながら、しかもそうした事実にはすらい気がつかないという有様である、ところで、こうした「喜劇の絶頂」と評されるほどの茶番劇の筋書きを麗々しく綱領的文獻にまとめあげているのはだれかといえば、この立役者こそ、ほかならぬメンシェヴィキの一方の旗頭、トロツキーであり、その世紀的文獻こそ、まさにトロツキーの力作、『われわれの政治的任務』なのである。

右に引用した第三節のなかで、レーニンは、新『イスクラ』編集局の「大計画」、すなわち、ブルジョア自由主義者たちに恐慌をおこさせないように「協定」をむすび、ゼムストヴォ議会で労働者が「平和的な」演説をするという、「新しい道」、新しい戦術的任務を鳴物入りで世界中に吹聴したのは、ほかならぬ「編集局のバラライキン」である、と指摘している。バラライキンとは、独特のイソップ的用語をつかって反動や社会的沈滞とたたかい、農奴制「ツァーリズム下の貴族」官僚支配をむちうつ作品を著わしたサルティコフ・シチェドリシ（一八二六—一八九九年）の

書いた『現代の牧歌』のなかに出てくる人物の一人で、「自由主義的なほら吹き、冒険主義者、嘘つき」の典型である。この「自由主義的なほら吹き、冒険主義者、嘘つき」の典型であるバラライキンが、ここで誰を指しているかは、すぐつぎの「旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには、実際に深淵がある」という、名文句によって簡単に知ることができる。それは、まさに、第二回党大会でレーニンに後足で砂をひっかけてマルトフの後尾にくつつき、マルトイノフといっしょになって経済主義的¹¹日和見主義的「少数派」の指導権獲得のためにけんめいに奮闘した「トゥーシノの渡り者」、トロツキーそのひとである。

このメンシェヴィクのバラライキンが新『イスクラ』の新しい戦術的任務を宣明した力作、『われわれの政治的任務（戦術上および組織上の諸問題）』は、同じ一味¹²メンシェヴィクのロシア社会民主労働党出版部の手により、一九〇四年にジュネーヴで発行されたが、その一見もつともらしい表題をかかげていながら、その中味は、もっぱら、旧『イスクラ』派¹³ポリシェヴィキをやっつけ、同時にブルジョア自由主義派への色目をつかうという、手のこんだ創作物であった。このバラライキンが旧『イスクラ』派¹⁴ポリシェヴィキにたいして、どんなにあくどい中傷と罵詈雑言をあびせているかということは注記で簡単に示すにとどめ、ここでは、ブルジョア自由主義派との「協定」という「新しい戦術的任務」を宣明したその綱領的文獻が、当のブルジョア自由主義派によってどんなに正しくうけとめられたかということを簡単にかえりみておくことにしよう。

(91) ここでは、これに関連した数あるレーニンの手紙のうちから二つだけえらんで、引用しておくにとどめよう。

(1) レーニンの、イエ・デ・スターツヴァ、エフ・レングニクその他への手紙（一九〇四年十月十四日付）から。

「……………予告されていたとおり、『イスクラ』の編集でトロツキーの新しい小冊子が最近出た。だから、これは新『イスクラ』

の『クレード』のようなものである。この小冊子は、厚顔さわる嘘のかたまり、事実の歪曲である。しかもそれが中央機関紙の編集のもとでやられているのだ。イスクラ派の活動はさんざんにけなしつけられている。曰く、——経済主義者のほうがずっと多くのことをした、イスクラ派は創意に欠けていた、彼らはプロレタリアートのことを考えなかった、ブルジョア・インテリゲンツィアのことについて、沈滞を生む官僚主義をいたるところに持ちこんだ——要するに彼らの活動は有名な『クレード』の綱領を実現することであった、第二回大会は——彼の言うところでは——サークル的組織方法を定着させようとする反動的な試みであった、等々。この小冊子は、現在の中央機関紙編集局と党活動家全部にたいする平手打ちである。この小冊子を読むと、「少数派」はひどい弱さをつき、ひどく偽善的にふるまっているので、彼らには生命力のあるものなどなにもつくりだす能力がないことがわかって、戦意がかきたてられる。ここには、たしかに、たたかうべき理由がある」(全集第五版、第四十三巻、一二八ページ、傍点—山本)。

(2) ロシア社会民主労働党イメレチノ・ミンゲレル委員会への手紙(一九〇四年十一月二十八日)から。

「……………諸委員会は、中央委員会に多数派の文献を要求した。中央委員会は、それは党の文献ではない、これが第一、第二に、それはプロレタリアートの階級的自覚を向上させるのになにも寄与しない、と称して、それを送ることを拒絶した。ほ、偽善者ども！ おそらく、新『イスクラ』の編集で出版され、したがって、ある程度までその『クレード』となっているトロツキーの新しい小冊子は、プロレタリアートの自覚を向上させるのに寄与するところが多いと云うのであろう。……………この小冊子には、旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある。大会はサークル的闘争方法を定着させようとする反動的な試みであった、旧『イスクラ』にはプロレタリアートのことなどどうでもよかった、イスクラ派はプロレタリアートを馬鹿者だと言っている、等々と述べてある。ストルーヴェが少数派の諸傾向を生命力のある傾向だと言ってほめたのも、無理はない」(前出、一四二ページ、傍点—山本)。

これら二つの手紙からの抜粋を読むと、『われわれの政治的任務(戦術上および組織上の諸問題)』という、たいそう立派な表題をもった論文の中味が、実際には、ボリシェヴィキをやっつけ、メンシェヴィキのやり方を正当化するための、うそとでっちあげのかたまりでしかないことがよくわかる。そのなかで、とりわけ悪質なのは、このバラライキンが、メンシェヴィキの本質的特徴をそのままとってきて、それをことごとくボリシェヴィキの特質だとして、これになすりつけて書きたてていることである。インテリゲンツィアのことばかり考えてプロレタリアートのことは考えていなかった、サークル的組織方法を

定着させようとした、官僚主義をいたるところにもちこんだ、——これは、まさに第二回党大会において、メンシェヴィキがさらけだした本質的特徴であり、これらの特徴をこそ、レーニンは鋭くあばいたのである。ところがなんと、レーニンを裏切ってマルトフ、マルトイノフに加担したバラライキンは、その本領をたちまち發揮して、これらの特徴をひとつのこらずポリシェヴィキになすりつけ、——しかも、インテリ第一、サークル根性確保の線をまもりながら——これをいちはやく全世界に向って鳴物入りで宣伝したものである。野心的政治屋、冒險主義者にとつて、その野望をすこしでもみたすものとあれば、手段をえらぶ余地はないのである。このなすりつけは一九一〇年になつても、その世紀的大論說の中でみごとに應用されており、一九一六年になつても、その個人的手紙のなかで相もかわらず生き生きとしてまもりつけられているのである。それゆえ、この典型的なバラライキンが、前節でみたように（本誌第二十六卷第一号、一七一ページ、参照、その「自伝」のなかで、——この鳴物入りで世界に吹聴した綱領的小冊子のことは、おくびにもださずに——マルトフとの「友情」は第二回大会後ながくつづかなかつたとか、ほかの「弟子ども」よりもずっとしつかりと、まじめに、レーニンのもとにかえつたとか、聞えるのよいことをあれこれ書きたてているのは、まっかなうそとでっちあげを並べているだけのことであり、したがって、終生バラライキンの本質は確固として抜くことができないものであつたという事実を、はつきりと実証しているものといつてよい。

一九〇四年十月に書かれたレーニンの論文、『世話、燒きの自由主義者』は、ブルジョア自由主義派の雑誌『オスヴォジデーニエ』の第五七号に載つた編集者、ベ・ベ・ストルーヴェの論文をとりあげ、そのなかでストルーヴェが第二回大会以後の社会民主労働党の弱化和解体の進行を心から歓迎し、ポリシェヴィキにたいする反感とメンシェヴィキ・新『イスクラ』派にたいする「真情あふれる」共感を表明し、社会民主主義的日和見主義にたいする自由主義派の絶大な期待を表明していることを指摘している。そこで、はじめに、レーニンが引用しているストルーヴェの文章のなかから関連部分を抜粋してつきにかかげ、そのつぎに、レーニンがあたえている総括的評価をお目にかけることにしよう。

（ベ・ベ・ストルーヴェの文章）

「いわゆるロシア社会民主労働党の内部の分化過程は、新しい局面に移った。極端な中央集権派（「レーニン派」、「頑固派」、「ボリシェヴィスト」）は足もとの地盤を失いはじめ、彼らの反対者の立場は、すくなくとも国外の「在留者」のあいだでは、ますます強固になりつつある。「メンシェヴィスト」（マルトフ派）は、ほとんどいたるところで優勢を占め、ますます多くの党機関をその手におさめている。それと同時に、「ボリシェヴィスト」からはグループや個人が離れ去りつつある。それらのグループや個人は、まだ最終的に少数派の「政綱」を受け入れるにはいたっていないけれども、しかし、少数派と闘争することをのぞまず、いまだに「たがたしている」党に平和を確立しようと努力している。……

「ボリシェヴィスト」は、形式的には、党にたいする忠誠という見地からすれば、反対者より堅実な立場に立っているが、本質の点ではその反対者より劣っている。本質の点では、後者はいま、「ボリシェヴィスト」よりも生活力があり活動能力あるものを擁護している。ただ残念なことには、この擁護は、かならずしも正当でない、というよりはむしろ、まったく不当なやり方でおこなわれている、手段の選択ではしばしば明らかにみつももないやり方でおこなわれている。そのような不当な擁護の実例となりうるものは、『イスクラ』紙上の最近の無数の論文と、つい近ごろ発行されたエヌ・トロツキーの小冊子、『われわれの政治的任務（戦術上および組織上の諸問題）』、ジュネーヴ、一九〇四年、一〇七ページ、価格七五サンティエーム、である。この小冊子には、多くの個所でほらを吹いているという特徴があるが、しかしそれは、社会民主主義文献に興味をいだくものが、すでにアキモフ、マルトイノフ、クリチエフスキー、その他の諸氏のいわゆる「経済主義者」の著作によってよく知っている、若干の思想をまったく正当にも擁護している。ただ残念なのは、著者が経済主義者の見解をとるところで戯画にしまっている」（全集第四版、第七卷、四五—四五二ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

ごらんのように、トロツキーの意図的小冊子に示された彼自身の本質は、同じ思想傾向のストルーヴェによって的確にとらえられている。それは、ひとつは、ほら吹き、大言壮語癖であり、いまひとつは、彼トロツキーが、札つきの経済主義者、アキモフ、マルトイノフおよびクリチエフスキーらとまったく同一の日和見主義的・経済主義的思想の持主であり、かつそのさわめて熱烈な伝道者である、ということである。

右の論文の最後において、レーニンは、

「では、同志アキモフにたいする裁判官ならびに証人として、新『イスクラ』編集局自身は、いったい、だれを引っぱってきているのか？——ストルーヴェ氏だ。けっこうな裁判官だ。これは、日和見主義の問題の眞の専門家で、精通者で、第一人者で、達人である。」

と述べ、つぎのようにしめくくっている。

「だから、編集局自身呼び出したこの証人が、トロツキーの見解の内容にくだした批評は、なおさら意味深長である。だが、トロツキーの小冊子は『イスクラ』の編集のもとに（第七二号、一〇ページ、第三段）出版された——このことを忘れるな——ではないか。トロツキーの「新」見解は、プレハーノフ、阿克セリロード、ザスーリツチ、スタロヴェルおよびマルトフの是認した、編集局の見解である。

ほら吹きとアキモフ主義（残念なことに、後者は戯画の形で）——これが、新『イスクラ』に共鳴し、それによって呼びだされた裁判官の判決である。

世話焼きの自由主義者は、今度は、うっかりまったくの眞実をかたつたのである」（前出、四五三—四五四ページ、傍点——レーニン、ゴシツク体——山本）。

ほら吹き、プラス、経済主義的日和見主義——これこそ、ブルジョア自由主義派の旗頭、ストルーヴェによっていみじくも看破されたトロツキーの本領である。それはまた、同時に、新『イスクラ』派＝メンシェヴィキの本来の體質を正確に示したものである。

さて、さきにあげたレーニンの論文の第三節のなかには、「バラライキン」のほか、「もつとも低い型の動員」とか、「ブルジョアの革命主義」⁽⁹²⁾とかいったような、新『イスクラ』派＝メンシェヴィキ特有の注目すべき「概念規定」

がすくなく見出されるが、これらについての吟味は割愛して、右の論文の最後の第四節にうつることとし、そのなかから、当面の問題について決定的意義をもつとおもわれるレーニンの結論的主張を、つぎに摘記することにしよう。

(92) この「ブルジョアの革命主義」という「形容矛盾」的「術語」の上を行く世紀的傑作は、「人民的議會主義」という新造語である。しかしこの中味の吟味は行論にゆずることにしよう。

「……ほかならぬ現在、プロレタリアートの政治活動の中心的焦点は、自由主義的な反政府派にたいしてではなく、政府にたいする威圧的な働きかけを組織することではなければならない。ほかならぬ現在、平和的な示威行進についての労働者とゼムストヴォ議員との協定、すなわち、純ヴォードヴィルのな効果の仕組みに不可避免的に墮するにちがいない協定をむすぶことは、もつとも時宜に適していない。もつとも必要なことは、自由をめざす決定的な闘争を準備するために、プロレタリアートの先進的な革命的分子を結集することである。……ほかならぬ現在もつとも大切なことは、蜂起をおこす能力と用意のある労働者大衆の力が介入しなければ、「社会における」現在の「解放運動」もまた、かならず不可避免的に、これまでのそれと同じようなシャボン玉となるであろうという固い信念を、革命的プロレタリアートのなかにかためることである」(前出、四七九—四八〇ページ、傍点—山本)。

(93) さぎにみたように、「わたしたちの社会主義運動はけっして法律を犯しません、暴力などいっさいつかいません。だからあなたがた支配階級もけっして暴力をもってわたしたちを弾圧してはなりません。もしもあなたがたが暴力をふるうならば、わたしたちは、その非を全国民の前で断固として糾弾するでありましょう」という、「人民的議會主義」者の必死の「要求提示」も、客観的にみれば、まさに、「暴力不行使」について支配階級とのあいだに「協定」を結ぶということであり、ブルジョア的法律によってほとんど無制限にみとめられる強力機構の發動を承認するということである。まことにレーニンが指摘し

ているように、それは、「純ヴォードヴィルの効果の仕組みに不可遊的に墮するにちがいないもの」であり、「喜劇の絶頂」でもある。全知全能をふりしぼつての議会選挙運動ただひとすじの奮闘にもかかわらず、勤労人民の抑圧と収奪とを加重するだけの「反人民的議会」がその「権威」をいや増すばかりとは。それとも、名目賃銀がほんのすこしあがり、「社会保障」が少々ふえたことをもって、「人民的議会主義」闘争のけっこうな勝利だ、とても言おうというのであろうか！

「人民の種々さまざまな層のあいだの政治的激昂は、蜂起が可能となるための必要条件であり、それが成功するため保障、プロレタリアートの創意が支持されることの保障であるが、この激昂はますますひろがり、たかまり、激化しつつある。だから、もしいまふたたびたれかが、即刻の突撃をさげび、ただちに突撃隊をつくれと呼びかけようなどと思いつくなら、それははなはだしく愚かなことであろう。⁽⁹⁴⁾ 事件の行程全体は、ツァーリ政府が近い将来にさらに甚だしい窮地におちいり、この政府にたいする憤激がさらに恐るべきものになることを保障している。政府は、自分をはじめたゼムストヴォ立憲主義とのたわむれにおいても、かならず窮地に陥るであろう。……政府は、あの恥ずべき、罪惡的な対滿州冒険においても、かならず窮地に陥るであろう。そして、この冒険は、決定的な軍事的敗北のばあいでも、ロシアにとって望みない戦争が長びくばあいでも、政治的危機をもたらすであろう」⁽⁹⁵⁾（前出、四八〇ページ）。

（94）プロレタリアートの革命闘争にとって、このばあい、「即刻の突撃をさげび、ただちに突撃隊をつくれと呼びかける」とが「甚だしく愚かなこと」であるのは、レーニンの指摘をまつまでもなく、明らかなことである。ところが、人民のあいだの政治的激昂どころか、小ブル的個人主義と泰平ムードのびまんしているわが国で、「革命的武装蜂起」を呼びかけるインテリ「左翼集団」は、いぜんとしてそのあとをたたない有様である。ほんのひとにぎりの「革命的インテリ」のテロルと人民大衆の階級的な強力的行動（＝テロル）とが、どんなにへだたっているかということを示すために、これにかんするレーニンの指摘をつぎにあげておこう。

「ブレーヴェの暗殺は、あきらかに、一のテロリスト組織に、ひじょうに大きな努力と長期にわたる準備活動とを費やさせた。そして、このテロリスト的な企てがうまくいけばいいだけ、それは、テロルのような闘争方法をとらないようにわれわれに警告しているロシアの革命運動の歴史全体の経験を、ますますはっきりと確証している。ロシアのテロルは、インテリゲンツィア特有の方法であつたし、いまでもそうである。そして、人民運動のかわりとしてのテロルではなくて、それと同時にこんなテロルが重要だといつて、人々がどんなことをわれわれに言つてきかせようとも、もろもろの事實は、わが国の個人的な政治的暗殺が人民革命の強力な行動とはなんの共通点ももっていないことを、反駁の余地なく立証している。資本主義社会における大衆運動は、階級的な労働者の運動としてののみ可能である。この運動は、ロシアではその独自の法則にしたがつて發展している。それは、ますます深さと幅を増し、一時的な鎮静から新しい昂揚へとうつりつ、自己の道をすすんでいる。そして、自由主義の波だけが、爆弾によつて更迭をはやめられ、いろいろな大臣の気分と緊密に結びついてたかまったり減退したりしている。だから、わが国で、ブルジョアの反政府派の急進主義的な（もしくは、急進主義者ぶっている）代表者のあいだにテロルへの共感がひじょうにしばしばみられるのも、ふしぎなことではない。また、革命的インテリゲンツィアのうちに、とくにテロルに心酔している（長いあいだにせよ、一瞬間にせよ）のが、プロレタリアートおよびプロレタリア的階級闘争の生命と力とを信じていない当の人々であるのも、ふしぎなことではない」（全集第四版、第八卷、六十七ページ、傍点—山本）。

(95) ここでツァーリズムの満州侵略とこれに結びついた日露戦争について、レーニンの評価と、これに対立する新『イスクラ』派メンシェヴィキ（トロツキーをふくむ）の見解とのちがいを示すために、『旅順の陥落』と題するレーニンの論文（一九〇五年一月）のなかから、若干の引用をこころみておこう。

「……………この破局は、全世界の資本主義的發展が異常に促進されること、歴史が促進されることを意味するが、ブルジョアジイは、このような促進がプロレタリアートの社会革命を促進するものであることを、ひじょうによく、あまりにもよく知つており、苦い経験によつて知つて……」（全集第四版、第八卷、三二二ページ）。

「……………ヨーロッパのブルジョアジイには、おそれるだけの理由がある。だが、プロレタリアートには、喜んでよい理由がある。われわれのもつとも兇悪な敵の破局は、ロシアの自由が近づいていることを意味するばかりではない。それは、ヨーロッパのプロレタリアートの新しい革命的昂揚をも予告しているのである」（前出、三二二ページ）。

「……………専制がこうむつた軍事的崩壊は、わが国の政治制度全体の破滅の兆候として、よりいっそう大きな意義をえている」

（前出、三四ページ）。

「国の軍事組織と、国の經濟体制および文化制度とのあいだの関連が、現在ほど緊密であつたことはかつてない。だから、軍事的崩壊は深刻な政治的危機の始まりとならずにはおかなかつた。すすんだ国と開けた国との戦争は、すでにいくたびか歴史にあつたように、こんども偉大な革命的役割を演じた。そして、戦争——あらゆる階級支配一般の必然的でとりのぞぎえない随伴物——の仮借することのない敵であることを自覚したプロレタリアートは、専制を壊滅させた日本ブルジョアジーがはたしているこの革命的任務に、目をふさぐことはできない。……新『イスクラ』も混乱を示さずにいることはできなかった。同紙は、はじめのうちは、ぜがひでも平和だという空文句をすくなくらずしゃべっていた。のちに、平和一般のためのえせ社会主義的な運動は、進歩的ブルジョアジーと反動的ブルジョアジーとのどちらかの利益にならず奉仕することになるのを、ジョーレスがはつきり示すという、この新聞は「前言を訂正」しようともがいた。いまではこの新聞はついに、日本ブルジョアジーの勝利を「あてこむ」(?)ことは時宜をえたものでないとか、戦争は、それが専制の勝利に終ろうと敗北に終ろうと、「それにはかわりなく」災厄であるとかいう、月なみの議論を吐くまでになつてゐる。

そうではないのだ。ロシアの自由の大業とロシア（および全世界）のプロレタリアートの社会主義のための闘争の大業とは、専制の軍事的敗北に大いにかかつてゐる。この大業は、ヨーロッパの現秩序守護者のすべてに恐怖の念を与えている軍事的崩壊から大きな利益をえた。革命的プロレタリアートは、戦争反対の煽動を倦むことなくおこなわなければならないが、そのさい、一般に階級支配の存続するかぎり戦争は除去されえないことを、つねに記憶していなければならない」（前出、三六—三七ページ）。

専制の打倒と社会主義革命の達成という革命的プロレタリアートの基本的任務の遂行をめざすレーニンの革命的敗北主義と、入閣主義者ジョーレスの階級協調路線のあとを追う新『イスクラ』派・メンシェヴィキのブルジョア的平和主義と祖国擁護の雑炊との対立、プロレタリア革命主義とブルジョア的自由主義との対立は、右のレーニンの小論のなかでも明らかに示されてゐるということができよう。かのバラライキン氏はといへば、傑作『われわれの政治的任務』の創作に没頭してゐて日露戦争のことは知らずにすんだのか、その「自伝」のなかではこの大事件についてひと言も述べていないのである。

なお、参考までに、同じ時期に發表されたレーニンの論文、『専制とプロレタリアート』のなかから、注目すべき一節を引いてつぎにかかげておこう。

「ロシアの政治的危機の發展は、いまやなによりも、日本との戦争の成り行きにかかっている。この戦争は、なににもまして専制の腐敗を暴露したし、いまも暴露しており、なににもまして専制を財政と軍事の点で無力化しており、くるしみぬいてきた人民大衆をだれよりもくるしめて蜂起へと駆りたてる。この犯罪的な恥ずべき戦争は、これらの大衆にこのようなはてしない犠牲を要求しているのである。専制国ロシアは立憲国日本にすでに打ちやぶられている。そして戦争が長びけば、それだけ敗北はひどく、はげしくなるにすぎないであろう。ロシア艦隊の最良の部分はすでに全滅させられており、旅順の状態も絶望的である。旅順の救援にむかっている艦隊は、成功はおろか、目的地に行きつく見込さえまったくない。クロパトキンのひきいる主力軍は、二〇万人以上を失って無力となり、敵のままで孤立無援の状態にあり、敵は、旅順の占領後はかならずこの主力軍を粉砕するであろう。軍事的崩壊は避けられない。それと同時に、不満、動揺、憤激が十倍につよまることも避けられない。

われわれは、全精力を傾けてこの瞬間にそなえなければならない。その瞬間には、ときにはここ、ときにはあそこですます頻繁にくりかえしおこっている燃えあがりの一つが、巨大な人民運動に導くであろう。その瞬間には、プロレタリアートは全人民に自由をたたかいとるため、公然の、広範な、そしてヨーロッパの全経験によって豊富にされた、社会主義のための闘争の可能性を労働者階級に保障するために、蜂起の先頭に立ちあがるであろう」(前出、一二ページ、ゴシック体―山本)。

「労働者階級の仕事は、大衆のあいだに煽動を十倍にし、政府のありとあらゆる動揺を利用し、蜂起の思想を宣伝し、いまだかにしゃべりたてられている中途半端な、まえてもって不成功におわる運命になっているすべての「措置」を例にとって、蜂起の必要を説明しつつ、自己の組織を拡大強化することである。いうまでもないことであるが、労働者は、ゼムストヴォの請願運動に呼応して、集会をひらき、ピラをまき、勢力が十分あるところでは、トゥルベツコイ諸氏の恐慌にはとんちやくせず、反動のための梃子うんぬんという俗物どもの悲鳴にはかまわずに、すべての社会民主主義的要求を声明するためにデモンストレーションを組織すべきである。そして、もしまえてもって、しかも国外から、大衆的なデモンストレーションのありうべき望ましい、より高度の型をあえて論じるなら、もしまた

デモ参加者の勢力をあれこれの建物の付近に集中する問題にふれるなら、われわれは、労働運動迫害のための警察事務がとりおこなわれている建物を、警察本部、憲兵本部、検閲本部の各建物や、政治「犯」がつながれている場所を、指示するであろう。労働者がゼムストヴォの請願運動を真剣に支持することは、ゼムストヴォ議員が人民の名において語ることのできる条件について協定することであってはならず、人民の敵に打撃を加えることでなければならぬ。……………労働者は、彼らの政治闘争の自由を拡大するものは、まったくなにひとつ見ていない。プロレタリアートの革命的襲撃におされて、政府は自由についてすこし論じることが自由主義者に許したのである！資本の奴隸の無権利と屈辱は、いまプロレタリアのまえにさらにいっそうはつきりと現われている。労働者は、政治問題を比較的自由に（ロシアの見地からして）審議するための、全国各地にある組織を全然もっていない。労働者は集会のためのお場をもたず、自分の新聞をもたない。労働者は、自分の同志を、監獄や流刑地からかえしてもらっていない。いま労働者は、彼らがまだ仕止めこそしなかったけれども、傷つけた、しかも彼らプロレタリアだけが重傷をあたえた、その熊の毛皮を、自由主義的ブルジョア諸君が分けどりはじめているのを見ている。労働者は、これらの自由主義的ブルジョア諸君が将来の熊の毛皮の分割にとりかかるやいなや、「過激党」や、「内敵」——ブルジョアの支配と安寧との仮借ない敵——にたいしても食ってかかりはじめ、吠えつきはじめているのを見ている。そこで労働者は、熊を打ち殺すために、また自由主義的ブルジョア諸君にむかって施物としてあたえようと約束されているもの——集会の自由、労働者の出版の自由、社会主義の完全な勝利を目ざす広範な、公然たる闘争のための完全な政治的自由——を力づくで自分のためにたたかいたるために、さらに勇敢に、さらに大きな集団となって立ちあがるであろう」

（前出、四八〇—四八二ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本）。

以上によって、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの革命闘争についての考え方、その立場、および実際のたたかい方がどんなにちがったものであったかということ、とくにメンシェヴィキのそれらが、いかにブルジョア自由主義派に媚を呈するみじめな日和見主義でつらぬかれていたか、ということは、およそあきらかにされたこととおもわれるが、なお念のため、こうしたメンシェヴィキのたたかい方が彼らの基本的な小ブル的思想によって規定されたものであるということをめぐりに説明しているレーニンの文章をつぎにかかげておくことにしよう。

「われわれの昔なじみの同志マルティノフも新『イスクラ』も、プロレタリアートの勢力にたいし、一般にプロレタリアートの組織能力、とくに党組織をつくりだす能力にたいし、プロレタリアートの政治闘争の能力にたいして、インテリゲンツィア的不信をいだくという、同じ過誤をおかしている。『ラボーチェ・デーロ』には、プロレタリアートは、雇主および政府との経済闘争の範囲をこえた政治闘争をやる能力をまだもたず、これからも長いあいだもたないで、これからも長いあいだもたないであろう、とおもわれた。新『イスクラ』には、プロレタリアートは独自の革命的行動をおこなう能力をまだもたず、これからも長いあいだもたないであろう、とおもわれるのである。そこで新『イスクラ』は、ゼムストヴォ議員のまえでの数十人の労働者の行動を、新しい闘争方法と呼ぶのである。旧『ラボーチェ・デーロ』も新『イスクラ』も、プロレタリアートの自主活動と自己教育という言葉を、誓約でもするかのようにくりかえし述べているが、それは、これらの誓約の背後に、プロレタリアートの真の勢力とその緊急の任務とにたいするインテリゲンツィア的な無理解がひそんでいるからにすぎない。旧『ラボーチェ・デーロ』も新『イスクラ』も、目に見える明白な成果の特別の意義や、ブルジョアジーとプロレタリアートとの具体的対置についての、まったくつじつまのあわない、深遠なたわごとを語り、こうして、人民蜂起を先頭とする、専制にたいする直接の攻撃という、ますますさしせ

まりつつある任務から、議會制度のまねごとのほうへ、プロレタリアートの注意をそらしている。旧『ラボーチェエ・デーロ』も『新イスクラ』も、革命的社會民主主義の古くからの組織上および戦術上の検討（改訂）をくわだて、新しい言葉と「新しい方法」をもとめてあくせく駆けめぐりながら、実際には、党をうしろへひっぱり、時代おくれの、真にまったく反動的なスローガンを提出している」（全集第四版、第八卷、一七一—一八ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

ここにレーニンによつて的確に批判されている「經濟主義者」——メンシェヴィキの基本的思想は、こんにちのわが国において、その影をひそめるところか、むしろ猖獗をきわめ、ますますその信奉者をふやしつたのである。これはまことに注目すべき事実といわなければならない。「革命的」を看板として少数の小ブル的学生をかきあつめたさまざまな急進的インテリ集團、いわゆる「新左翼」その他の「セクト」が、メンシェヴィキの旗頭であるトロツキーをかついだり、わけわからず「反スタ」などという題目をならべたりして、もっぱら「学生」鬭争に、しかも、血で血を洗うような「セクト」同士の鬭争に、けんめいになっているのは、「プロレタリアートの組織能力、とくに黨組織をつくりだす能力にたいし、プロレタリアートの政治鬭争の能力」にたいする、そしてまた「プロレタリアートの眞の勢力とその緊急の任務」にたいする、小ブル的インテリの根づよい「不信と無理解」を端的に示しているものである。とはいへ、これらの「セクト」集團は、現支配体制を「否定」し、小ブル的インテリの「セクト」自体の力で——ときには「爆弾」鬭争で——現体制の变革を——残念ながら、ただ言葉の上だけであるが——目指しているという意味で、またそのかぎりにおいて、多少の「革命性」をみとめることができる。それは、厳密にいうならば、「左翼的」日和見主義であり、「左翼的」メンシェヴィズムである。これにたいして、形の上でも実質の点で

も、右の「經濟主義者」およびメンシェヴィキの基本思想を堅持し、これを極限までおしすすめているのは、「日共修正主義集團」である。この「集團」の指導層が、「プロレタリアートの政治闘争の能力」、およびその「眞の勢力とその緊急の任務」にたいする完全な「不信」と「無理解」をどんなにかたくまもっているかということは、彼らの闘争方針にみごとに示されている。彼らの唯一の闘争目標は、ブルジョア「議會」で「多数」をにぎることであり、そのためにいっさいの闘争は、選挙闘争に、つまり、「一票の獲得」に、さざげられる。「黨員と赤旗読者」の獲得のための闘争もそのためであり、「大幅賃上げ闘争」も、その他の「政治的」闘争も、ことごとく「支持票」獲得にその焦点をあわせて組まれる。小ブル層とブルジョア自由主義派に媚を売ることに熱をいれながら、「一票」をもたない「底辺」の勤勞人民大衆には眼もくれないという「活動方針」も、そのためである。「平和と民主主義」を唯一の看板にし、現支配体制のもとでも——つまり、この「金融資本にとっての天国——賃銀奴隸にとっての地獄」においても——この「修正主義集團」指導層の指図どおり「法にしたがっておだやかに平和的な闘争」をしていさえすれば、賃銀は大幅にあがり「豊かで幸せな生活」がみんなに保証されるのだという空宣伝をふりまいて、ひたすらに「票」をかきあつめようというのが、彼らの「新しい闘争方法」であつて、そのためにこそ、「独裁」および「ブルジョア的議會制度」という科学的用語も、「執政」とか「人民的議會主義」とかいふ「深遠なたわごと」でぬりつぶされる。「強力革命とプロレタリアートの独裁」というマルクス主義の精髓は、こうした「たわごと」ですっかり抜きとられ、すべては「議会的・平和的方法」ひとつにおしこまれる。まことにレーニンが的確に指摘しているように、彼らは「革命的社會主義の古くからの組織上および戦術上の根本原則の改訂をや、新しい言葉と『新しい方法』をもとめてあくせく駆けめぐりながら、実際には、党をうしろにひっぱり、骨抜きにし、眞にまったく反革命的な闘争をおしすす

めている」ものにほかならないのである。